

## 第2章

# 内容

### 【活用の意義】

本カリキュラムを活用する際には、子どもの具体的な姿を想像しながら、学びのつながりについて考えることができるように、実践から伝えたいことや考えてほしいことが記載されています。最後の項目には、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期を見通したり振り返ったりする観点から解説し、架け橋期の教育の充実に向けて考えます。

### 事例の見方

【事例に共通にする項目】

事例タイトル

・協同性  
・言葉による  
伝え合い

①事例を読み取る  
キーワードを明示して  
います

<事例で伝えたいこと>

②考える視点を明示しています

事例を通して分かったこと

③Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期全体を考えたとき、  
この事例の時期からの「見通し」や「振  
り返り」について、解説しています。

\*事例によって、伝えたいことが異なることから、項目全てを統一していません。

**事例1** I期(5歳児6月)  
だってわからなかったんだもん  
—助け鬼の必要なルールを考える—

事例を読み取る  
キーワード

・言葉による  
伝え合い  
・協同性  
・道徳性・規範意識  
の芽生え

<事例で伝えたいこと>

I期の時期には、数人の友達で遊びを楽しめるように、新たにルールのある遊びを取り入れています。最初は、基本的なルールで遊び始めますが、次第に遊びの中で、自分たちでは解決できない困りごとの場面が出てくることがあります。

この事例では、教師はその場面を捉えて、幼児の困りごとを学級全体で取り上げ、必要なルールについて考え、幼児と共に必要なルールをつくっていく過程について考えます。

① 事例の概要

学級全体で助け鬼を繰り返し楽しむ中で、嫌だったことや困ったことなどを教師や友達に伝える姿が見られるようになった。教師は、学級全体で困っていることについて取り上げたところ、新たなルールが生まれ、自分たちがつくったルールを守って遊ぶようになった。その話し合いをきっかけに友達の気持ちを知り、受け止めようとする姿が見られるようになっていった。

② 具体的な活動の様子

学級全体での活動や好きな遊びの中で助け鬼を繰り返し楽しんできた。助け鬼の名称は、「サメ・マグロ」と決めた。追いかける側がサメチーム、逃げたり助けたりする側がマグロチームになり、2チームに分かれて遊んでいた。友達を誘い、自分たちで遊び始めるようになったが、思うようにならないことがあると、遊びを途中でやめたり教師に知らせたりする姿が見られるようになった。

【助け鬼の場面】

A児：タッチしたよ！

B児：タッチされていないよ！

A児：だって、タッチしたもん。つかまりたくないからってずるい。

B児：ずるくないよ！

二人は、言い合っている

教師：(近づいてきて) どうしちゃったのかな。さっきまで楽しそうに遊んでいたのにね。

A児：タッチしたのに、逃げるのずるい。

B児：だってタッチされていないもん。

教師：先生も分からないなあ。何かいい方法があるといいよね…。ずっと言い合っているのはつまらないもんね。そうだ、こういうときどうしたらいいか、みんなに聞いてみようよ。

そこで、教師は、学級全体で一緒に遊ぶ友達の気持ちを考えることができるよう話し合う機会をもった。すると、互いに思いを主張し、友達の気持ちを受け止め、必要なルールについて考えを出し合う姿が見られた。

【学級全体の話し合いの場面】

教師：Aさんがみんなに伝えたいことがあるみたいです。聞いてみよう。

A児：Bちゃんがタッチしたのに動いてくれなくて嫌だった。

B児：だって分からなかったんだもん。

A児：「タッチしたよ。」って言ったよ。それなのに、無視したじゃん。

B児：無視してないよ。本当に分からなかったんだもん。

教師：「タッチしたよ。」って言ったことが聞こえなかったのかな。

確かに、一生懸命走っていると聞こえないかもしれないね。どうしたらいいかな…。

C児：じゃあ、タッチしたらその後に手をつないでサメの家に連れて行くことにしたらどう？

教師：なるほど。タッチしたら手をつないで連れていくってことね。

Cちゃんが「どう？」って言っているけれど、みんなはどう思う？

D児：それいいね！

E児：いいんじゃない。タッチだけだと捕まったかどうかわからないもん。

教師：なるほど。タッチだけだと確かに、捕まったことに気付かないかもしれないね。

でも、その後に手をつないだら捕まったことが分かるね。

A児：分かりやすい！今度から、そうしてみよう！

B児：やってみよう！

多くの幼児が賛同する

教師：よい考えが出てきてよかった。Aさん、みんなで相談するとよい考えが出てきて、すごいね。今度は、そうしてみよう。

話し合いを経て、タッチされて捕まったマグロは、サメと一緒にサメの陣地に移動するという新しいルールができ、遊びの中でも友達と一緒に繰り返し楽しむようになっていった。また、学級での話し合いをきっかけに自分の気持ちを友達に伝えるだけでなく、友達の思いを聞いたり、受け止めたりしながら遊びを進めていこうとする姿が見られるようになった。

### ③ 環境の構成

- ・話し合いに気持ちを向けることができるように、助け鬼をした活動とは別の場所を選んだ。
- ・友達の考えに関心をもつことができるよう、話を聞くときは階段の上（\*ステージという）に座り、話す幼児はステージの前に出るように促し、互いに顔を見合えるようにした。



#### ④ 意図

- ・一緒に遊ぶ友達の思いを知り、みんなで楽しく遊ぶために必要なことを考えながら遊びを進めていってほしい。
- ・互いに思いを主張し、折り合いをつける体験を通して、相手の気持ちを知り、自分なりに考え受け止めたり、自分の気持ちを調整したりしながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。

#### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・自分の気持ちや考えを伝えたり、友達の思いを受け止めたりする 言葉による伝え合い
- ・友達と共通のイメージを楽しみながら遊ぶ 協同性
- ・相手の立場になって、自分の行動を振り返ったり、必要なルールについて考えたりしながら遊ぶ 道徳性・規範意識の芽生え
- ・友達と折り合いをつけながらきまりをつくったり、守ったりする 道徳性・規範意識の芽生え

#### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅰ期の振り返りとⅡ期への見通し）

Ⅰ期では、友達を遊びに誘い一緒に遊ぶ中で、自分の気持ちを言葉で表現する姿が多くみられるようになってきています。一方で、自分の主張をすることによって、思いがぶつかる場面も多くみられ、思い通りに遊びが進まないことから幼児同士のいざこざにつながる姿も見られる時期です。

そのためⅠ期は、教師との信頼関係を基に幼児が自己を発揮する中で、相手の気持ちを知り、相手のことを考えて遊びを進められるように、教師は細やかな関わりを積み重ねていくことがとても重要です。5歳児とは言え、自分の思いのすべてを言葉で表わせるようになっているわけではありません。むしろ友達との関わりの中で、感情が複雑に絡み合って言葉にならないに気持ちを蓄積しているともいえます。教師は、そのような場面を捉えて幼児の気持ちと向き合い、幼児が安心して自分の気持ちを表出したくなるように援助し、幼児が聞いてもらった、受け止めてもらったという安心感や信頼感を得られるようにすることが、ひいては相手の気持ちを聞こうという姿勢につながり、相手の気持ちを考えたりできるようになっていきます。

そうしたⅠ期での互いの気持ちの伝え合いの経験がその先のⅡ期の小学校以降の人間関係を築く基盤になるのではないかと考えます。

また、このような経験が、小学校以降の道徳性やよりよい人間関係を築いていく力、主体的に自己を発揮しながら学びに向かう力等につながっていくと考えます。

## 事例2 I期（5歳児7月）

これを植えたらスイカできる？

—好奇心から食への興味や関心を広げる—

事例を読み取る  
キーワード

・試行錯誤  
・思考力  
・自然との関わり・  
生命尊重

### <事例で伝えたいこと>

この事例では、給食で提供されたスイカを食べたことをきっかけに、種を数えることで数に関心をもったり種を植えたらスイカができるという食への興味や関心につながったりする様子について考えてみます。

#### ① 事例の概要

5月に給食で提供されたトマトの種を植えたら芽が出て花が咲いた経験から、スイカの種も植えたらスイカができるのではないかという疑問が出てきて、実際に植えることにした。幼児の好奇心から食への興味や関心につながった。

#### ② 具体的な活動の様子

5月の給食でトマトが提供された。保育士と一緒に給食を食べながら「トマトの種って土に植えるとトマトが成るんだよ」と幼児に話すと興味をもった幼児から「植えてみたい」という声があがる。食べ終わってから3人の幼児たちと園庭に行き種をプランターに植える。保育士が人差し指を土に差し込んで見せ、「こうやって、爪のところまで土に入れて穴を開けて、ここに種を入れるよ。土はぎゅっと押すと固くて芽が出なくなっちゃうからそっとかけてね」と保育士がやって見せる。幼児も保育士のやり方を見ながら同じように土に穴を開けて種を植えていく。幼児は毎日楽しみにプランターを覗いているがなかなか、芽が出てこない。「何で芽が出ないんだろう」「日陰だからじゃない？」「鳥に食べられたんじゃないかな？」と幼児が考えて話し合い、「プランターを（陽の良く当たる）あっちに動かしたい」「鳥に食べられないように何かかけたい」と幼児たちが考えて保育士に言いに来た。保育士と一緒にプランターを日なたに運び、水切りネットを掛ける準備をする。数日後、待ちに待ったトマトの芽が出てきて喜んでいた。

7月の給食でスイカが提供された。A児が「スイカの種が3個しかなかった」と指導給食と一緒に食べていた調理員に話しかける。調理員が「私は9個だよ」と言うと周りの幼児も種を数え始め、口々に「僕は12個」「私は9個」と言っている。すると5月にトマトの種を植えたB児が保育士に「スイカの種を植えたら、スイカができる？」と聞く。保育士が「できるかな？」と答えるとC児が「土に植えよう、でも畑はもう野菜でいっぱいだね」と言う。保育士が「むこうに空いているプランターがあるから持って来ようか」と言うと「そうしよう！」と言って自分の食べたスイカから出てきた種を洗ってティッシュペーパーに包んで園庭に行く。保育士がプランターを運んでくるとC児が土に人差し指を爪の深さまで差し込み「ここまで入れるんだよね」と言って穴を開ける。A児は全部の種を植えるつもりだったが3つ穴を開けて「残りは家で植えるんだ」と言っている。保育士が「全部で何個あったの？」と聞くと「12個だよ」

と答える。保育士が残りの種を指さしながら数え「残りは9個だね。お家でもスイカができるといいね」と言うと「うん」と言って頷く。B児は「1、2、3…15」と数えながら持っている種の数15の穴を開けて種を入れて優しく土をかぶせていく。

### ③ 環境の構成

- ・ 幼児と一緒に保育士や調理員が食事し、楽しい雰囲気の中で食材の話をしたりマナーについて指導したりしている。
- ・ 園庭の畑やプランターで栽培し、幼児と水やりをしたり、できた野菜を調理してもらい食べたり、幼児のクッキングの材料にしたりしている。
- ・ 業者から種や苗を買って植えるだけでなく、今、自分が口にしていく野菜の種からまた野菜ができるということなど、給食の中で話題にしている。

### ④ 意図

- ・ 自分たちが食べているものがどうやってできているのか知り、食べ物を大切にすることを学んでほしい。
- ・ 幼児たちが「なぜ」「どうして」と疑問に思ったことを自分たちで考えたり試したりする経験をしてほしい。

### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・ 芽が出ないのはどうしてなのか考えて試してみる。 自然との関わり・生命尊重 思考力
- ・ 自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする 言葉による伝え合い
- ・ スイカの種の数数を数えて、同じ数の穴を作ったり、植える数と残った数を考えたりする。  
数量や図形、標識や文字などへの関心
- ・ 食物の種から食物ができることを知り、興味や関心が出てくる。

自然との関わり・生命尊重

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

保育士と一緒に食事をしながら食へ興味をもてるように会話をしたりきっかけを作ったりしている。トマトの種を植えて、なかなか芽が出てこないことで「なぜだろう?」「どうしてだろう?」と幼児たちが考えて試行錯誤をし、実際に花を咲かせる体験をした。それによってスイカの種を見て、「これも同じようにスイカができるのではないか?」と推測し、保育士に聞いている。保育士が最初に答えを出さず見守ることで、試行錯誤する姿につながった。また、食べたスイカから出た、種を数えることで数への関心にもつながった。Ⅰ期では興味をもった少人数で種植えを行っているが、Ⅲ期になると、他の幼児たちへも広がり、クラスで栽培し、水やりの必要感が出てくると、クラスの当番活動につながる事が予想される。



**事例3** II期（5歳児10月～12月）  
その考えもいいね！  
—幼児同士が認め合える関係づくり—

事例を読み取る  
キーワード

・道徳性・規範意識  
の芽生え  
・協同性

<事例で伝えたいこと>

この事例では、遊びや活動をとおして、幼児が自分の思いや気持ちを友達に伝えたり、自分とは異なる相手の思いや気持ちに気づき、受け止めるようになっていったりいく過程を追っています。幼児がそれぞれのよさを認め合い、思いや考えを受け止め合って遊びや活動に取り組んでいくようになるまでの、発達に必要な幼児の経験や教師の関わりについて理解を深めていきます。

① 事例の概要

A児、B児は日頃から一緒に遊ぶことが多い。なかでも、A児が遊び方や遊びのイメージを一方的に主張し、B児はA児に従って動くことが多かった。教師は、B児の表情から思いを察して、A児に伝えるよう励ましたり、A児がB児の気持ちを考えられるよう言葉を掛けたりするなどの関わりを続けていた。10月の運動会に向けてチームやグループでの活動に取り組む中で、一人ひとりの幼児が自己を発揮し、友達と一緒に協力したり考えを出し合ったりして楽しんだ経験を経て、友達関係が広がり、力関係や人との関わり方も変容していった。

—A児とB児の実態、関係性について—

A児とB児は4歳児学級の頃から親しく、進級後も声を掛け合い、一緒に遊び出すことが多かった。2学期が始まり、B児の登園時間がしだいに遅くなっていった。登園後、すぐに遊びだす様子も見られなくなり、気になった教師は、降園後に母に家庭での様子を尋ねた。母から、「実は、この数日間『幼稚園に行きたくない』と言うことがあって…。理由を聞いても『楽しくない』と言うだけで、原因がよく分からなくて困っているんです。何かありますか？」との話があった。担任も思い当たることがなかったため、様子をよく見ていくことを母に伝えた。翌日以降、A児とB児の遊びを側で注意深く見ていた教師は、B児がA児に対して思いを出せず、A児から言われた通りに動いていることに気付いた。それまで、二人はトラブルなく楽しんで遊んでいると捉えていたが、A児の一方的にリードして遊びが進められていたこと、B児の本当にやりたいことが実現されていないことが分かり、担任は二人の遊びに丁寧に関わっていくことにした。

② 具体的な遊びの様子

【10月 縄跳び—降園前の集まりの時間】

A児とB児二人で遊んでいる短縄跳びの遊びに、C児が仲間に入りたいと声を掛けた。しかし、A児はC児を遊びに入れようとしない。

C児：Aちゃん、私も縄跳びしたい。一緒にやろう。

A児：えー、今、Bちゃんと遊んでいるから。Cちゃん、縄跳びできるの？

C児：前跳びできるようになったよ。

A児：私たち、10回も速く跳べるんだよ！ねー、Bちゃん！

B児：ねー！一緒に数えて跳んでたんだよねー。

A児：Cちゃん、10回跳べる？跳べないと仲間に入れないよ。

C児：(少し黙ったあと)じゃ、私も教えて。

A児・B児：どうする？いいけど、もう片付けになっちゃうから。

C児は仲間に入れず一人立ち尽くしたまま、片付けの時間になる。

教師：Cちゃん、何かあった？

C児：AちゃんとBちゃんが仲間に入れてくれない。

A児：え？いいよ、別に。あ、でも、もう片付けだから。今日はもう終わりだ。

教師：あれ？何かおかしいな。先生が言ったら、仲間に入れるのって違うと思う。

Cちゃんは一緒に遊びたいんじゃないの？だから教えてって言ってたんじゃないの？

A児：でももう片付けだもん。

教師：ちょっと待って。片付けの時間だけど、今、先生は大事な話をしているよ。

A児・B児：(黙る)

教師：Cちゃんは今、縄跳びを頑張っているんだよね。Cちゃんが『仲間に入れてくれない』って言ってるよ。先生は、理由を知りたい。Aちゃん、Bちゃん、教えて。

A児・B児は二人で顔を見合わせる。

教師：『できないからだめ』って言われたり、『教えてあげない』って言われたりしたらどう？

Cちゃんはどんな気持ちになると思う？先生は、Cちゃんのことを考えてほしいと思っている。これは、大事なお話だよ。

-----降園前の集まりの時間-----

教師：今日、先生は、みんなに考えてほしいことがあるの。

友達に『遊びに入れて』って話したときに、『こういうことができないと入れてあげない』とか、『○ちゃんは、一緒に遊べるけど、△ちゃんはだめ』とか、そういう言い方はどうかな。自分だけ入れてもらえなかったら、みんなはどう思うかな。

D児：悲しくなると思う。

E児：自分だけ入れてもらえないのは嫌だ。

隣同士で幼児が「嫌だよねえ」「私も」など、口々に言う。

教師：Aちゃんはどう？Aちゃんにも考えてほしい。Bちゃんにも考えてほしい。

A児・B児：・・・。

F児：「だめ！」って言わない方がいい。

教師：「だめ」って言われたら怖いよね。何か理由があるのだったら、きちんとお話してほしい。

お友達を悲しい気持ちにさせてしまうのは、先生まで悲しくなる。

F児：あと、みんなから何回もだめって言われると悲しくなる。

B児：私もそれは嫌だった。

教師：嫌なことがあると幼稚園が楽しくなくなっちゃうよね。どうしたらいいんだろう。



## 【10月 ステージごっこ】

A児、B児、C児がステージごっこを始めた。踊りや振り付け、流れなどを考え、お客を呼ぶことになったが、A児はB児の言葉を聞こうとせず、自分の思いを通そうとしていた。

A児：Cちゃん、違う。最初は挨拶するって言ってたでしょ！まだ踊らないよ！

C児：あ、そうか。

A児：挨拶してから、最初に踊るのは「ライラック」ね。私が考えたから、私が真ん中で踊る！

C児：私はプリンセスの踊りがいいな。

A児：ライラックの方がいいよ。ライラックの方がみんな好きだし、ママも好きなんだよ。

C児：でもプリンセスもやりたい。

A児：じゃ、2番目はCちゃんが考えたプリンセスのダンスやってもいいよ。でも最初は私の番だから、Cちゃんはこっち（端）ね。

お客を呼び、1曲目を踊り終えた

C児：次は私。Aちゃんがこっち（端）に来て。

A児：ちょっと待って。今の曲、人気だから、もう一回やろうよ。ね！

A児、曲を戻そうとする

教師：2番目にCちゃんの曲って約束していたよね。Aちゃん、どうして順番を変えるの？

C児：私もずるいと思う。

A児：じゃ、いいよ、分かった。Cちゃん、していいよ。

教師：Cちゃん、自分の曲ができないと思って心配になったよね？約束が違うよーって。

C児：Aちゃん、2回目も自分の踊りやろうとして…。せっかく約束したのに。

A児：Cちゃん、ごめんね。

C児：もう、いいよ。

-----降園時、保護者との挨拶-----

教師：今日は、お友達とステージごっこを楽しんでいました。何の踊りをするか、ステージのどこに立つかなどを相談する場面があって、初めは黙って友達の考えを聞いていたので『Cちゃんはどうか？』と声を掛けようとしたのですが、自分でやりたいことを友達に伝えることができたのです。遊びの途中で自分の気持ちも言葉にして言うことができました。

母：そうですか。少しずつでも気持ちを出せるようになってきているようで安心しました。」

教師：引き続きCちゃんを丁寧に見守り、Cちゃんが自信をもって友達に思いを伝えられるように支えていきます。

## 【11月～12月 作品展】

作品展に向けて、グループごとに遊びの場を製作することになり、A児とC児は他の幼児3名と共にお姫様の暮らすお城をつくることになった。お城の場はグループのみんなでつくり、遊びに来たお客がお姫様に変身するための衣装は、それぞれが一つずつ製作することになった。C児はドレスや冠、靴やバックなど、時間をかけて丁寧に製作を進め、できあがりにとっても満足していた。

作品展当日、別のグループの幼児や他学年の幼児がC児たちのお城に遊びに来た。衣装を選ぶコーナーでは、C児が作ったドレスや冠は人気があり、複数人が順番を待つような場面も見られた。「すごくかわいい！」「本物みたい！」などと認められたC児は、張り切っていた。

C児：やっぱり私がドレスとかを着せてあげる係になる！私のドレス、着るとき少し難しいんだ。AちゃんとBちゃん、受付の人をしてくれる？」

A児・B児：わかった。いいよ。

教師：Cちゃんのドレス、大人気だね。バックとか靴も頑張ってつくったもんね。

C児：うん！みんな私のドレスが着たいんだって。だから私が、着せてあげる係になったんだ！

D児：いいな。私のドレスもCちゃんみたいにしたいな。

B児：私、こういう靴が作りしたい！

教師：Cちゃんにつくり方を教えてもらったらいいね。

C児：いいよ！教えてあげる！

A児：私も教えて。

C児：いいよ！

教師：ここでしか着られないドレスだわ。先生も着たくなっちゃうもの。お城に来るお客さん喜ぶね、きっと。

### ③ 環境の構成

- ・ C児が自分の気持ちを言葉にして友達に伝えられるようにするために、特にA児とのやり取りの場面では、表情の変化等に注意し、様子を傍で見守り、タイミングを逃さずに介入し、C児の言葉を引き出したり、A児の勢いに気後れしないように教師が代弁したりするようにした。

### ④ 意図

- ・ A児とC児は、進級時から一緒に遊ぶことが多かったが、相手に対して自分の考えや気持ちを率直に出すA児に対して、C児は思いを出し切れず、我慢してしまうことが多かった。教師は、C児がA児に対しても自身の気持ちを言葉で表せるようになってほしいと考え、共感し、友達からにされて嫌だったという気持ちを受け止めたり、気持ちを引き出し、言葉で伝えるように励ましたりした。
- ・ C児が自信をもてるように日常な様々な場面で言葉を掛け、後押しする援助を続けた。
- ・ 活発で、言葉でのやり取りも得意なA児は、遊びや活動の中心になることが多く、考えや思いが難しく友達に受け止められることが多かった。また、言葉や態度がきつくなる傾向があったため、教師は、A児のよさも受け止めつつ、A児が相手の思いに気付いたり、自分とは異なる相手の考えを受け止めたりできるように、その都度言葉を掛けたり、友達とのやり取りの中で葛藤経験につながるような場面を意図的につくったりした。

### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から、省察する。）

- ・ 教師の援助を受け、不安な気持ち等を乗り越えて、自分の思いや考えを友達に伝えている。

自立心 言葉による伝え合い

- ・ 一緒に遊びたい相手の思いや考えを受け入れるために、自分の思いを調整しようとする。

道徳性・規範意識の芽生え 協同性

- ・ 自分とは異なる考えをもつ相手の気持ちに気づき、受けとめたり、折衷案を考えたりしている。

道徳性・規範意識の芽生え 協同性

- ・ 見聞きしたこと、経験したことを遊びに取り入れ、再現しようとしている。

社会生活とのかかわり

・行事への期待感や自分なりの目的に向かって、力を出そうとしている。

豊かな感性と表現 自立心

・自分が知ったことを言葉や動きで友達に伝えようとしている。

豊かな感性と表現 言葉による伝え合い 協同性

・グループの中で力を発揮することや、グループの友達から頼りにされることを喜んでいる。

協同性 自立心

・友達の考えのよさを受け止め、自分でも取り入れようとしている。

思考力の芽生え 協同性

## ⑥ 事例をとおしてわかったこと（本事例の振り返りとⅢ期への見通し）

この事例は、幼児が自分の思いや気持ちを友達に伝えたり、自分とは異なる相手の思いや気持ちに気づき、受け止めるようになっていったりする過程を追ったものです。C児は受け止めてもらえないのではないかと不安等から、A児に対して思いを出すことができませんでした。教師はC児の表情や様子に注意し、思いを引き出し代弁する、自分の言葉で伝えられるよう、一緒に言葉を考え、側で支えるなど、段階的に援助を続けるとともに、C児が力を出している姿を小まめに捉え、友達や学級の中でさりげなく認めるなど、C児が自信をもてるような言葉を掛けていました。一方でA児に対しては、相手の表情や反応等から気持ちに気づき、自分の言葉や態度について振り返ったり、自分の思いを調整したりすることができるような関わりを続けました。また、折に触れて、幼児が抱えている、口惜しさや戸惑い、悲しさなどの感情に寄り添いながらも、思いを調整できるよう側で支えました。

幼児が友達と思いや考えを伝え合い、調整し合いながら遊んだり、活動したりする楽しさを感じるまでには、「自分の思いを出す」「自分とは異なる相手の思いに気づく」「相手の思いを受け止める」など、段階的な経験の積み重ねが必要です。教師は、一人ひとりの幼児にとって、発達に必要な体験は何かを見極めて、援助します。その際、大切なことは、教師との信頼関係が土台になっているということです。幼児が安心して自分の思いを表せるように、また、葛藤体験を乗り越えていけるようにするためには、気持ちを受け止め、寄り添う教師の存在が欠かせません。

事例の中のC児は、10月には教師の後押しを受けることで自分の思いを表すようになっていきましたが、12月には自分の言葉で友達に伝えるような姿も見られていました。事例の中のA児は、教師の言葉掛けにより、自分の行動を振り返り、自己を調整し、友達の考えを受け入れていましたが、そうすることで楽しく遊びや活動に取り組めたという経験は、後に自分で葛藤を乗り越えようとする力につながります。時には、教師も毅然とした態度で、人にしてはいけないことや嫌がることはしてはいけないと伝えることも重要です。

Ⅱ期でのこのような経験の積み重ねが、Ⅲ期において、新しい人間関係の中でも、相手に理解しやすいよう自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを考え、自分の振る舞いを振り返ったりするなど、気持ちや行動を自律的に調整し、友達と楽しく過ごそうとする姿につながっていくと思われます。

**事例4** II期（5歳児10月）  
みんなで おもちゃを買いに行こう  
— 地域との関わりをとおして —

事例を読み取る  
キーワード

・社会生活との  
関わり  
・言葉による  
伝え合い

<事例で伝えたいこと>

この事例は、自分の思いや考えを言葉で伝え、自分の主張が通らないことがあっても折り合いをつけながら、受け入れ合って話し合いを進め、決定していく過程を大切にしています。そして、幼児が地域との関わりをきっかけに地域との関わり方について考えます。

① 事例の概要

地域のイベント『かかしコンクール』に年長児が共同作品のかかしを出展した際に、賞（商品券）をいただいた。幼児たちが「これどうしよう？」「どこで使えるの？」と疑問をもったことをきっかけにクラスで話し合いをし、買い物をすることにした。話し合いでは、ほしいものがたくさん挙がる中、自分の意見を主張するだけでなく、みんなのことも考える気付きがあった。結果、みんなが使える玩具をクラスで話し合い、地域の商店街へ買い物に行った。

② 具体的な活動の様子

日頃から、集まりの前には手遊びやクイズなどを楽しみ、八百屋さんゲームにも親しんでいる。秋まつりには、自分たちで考えたお店屋さんごっこを経験している。

【みんなで賞をもらったよ】

保育士：みんなで作ったかかしが賞をいただきました。景品はお買い物券です。

幼 児：やったー、買い物できるの？お金みたいに使えるの？

保育士：そうだよ。でも、どうしようか？みんなはこのお買い物券、どうしたらいいと思う？

幼 児：ぼくは、〇〇がほしいな。

幼 児：わたしは△△がいいな。ねえどこに行くの？

保育士：お買い物券はどこのお店で使えるかな。行ってみないと先生にもわからないなあ。

そこで幼児たちは、商品券を預かっている園長に聞きに行く。

幼 児：園長先生。お買物券って、どこのお店で使えるのか、教えてください。

園 長：そうね、園長先生もはっきりはわからないなあ。

お店がたくさんあるところに行ってみると分かるかもしれないよ。

幼 児：探しに行こう！

保育士：どんなお店があるか？どこで使えるか？何が売っているか？

みんなで商店街に行ってみましょう。

幼児たちは、いただいた商品券を使って玩具や本のお買い物を楽しみにしながら歩く。

【商店街って知ってる？】

商店街のある方向に散歩に出かけて行く。

幼 児：ここきたことある！

保育士：お店やさんが見えてきたね。来たことある？□□商店街というみたい。

幼 児：知ってる。行ったことあるよ。おもちゃ買ってもらったんだ。

保育士：どんなお店があるか？どんなものが売っているか？見てみましょう。

【地域の方にお礼を伝えよう】地域＝地域の方

挨拶し、店内に入り、お店の人に賞をいただいたお礼を伝える。

幼 児：「かかしコンクール」で賞をいただきありがとうございました。

地 域：いえいえ。かわらしいかかしでね。こちらこそ、ありがとうございました。

わざわざ来てくれたの？

幼 児：商品券で何が買えるのか、見に来ました。

保育士：商品券をいただいたので、みんなで何をかうか相談して決めるのよね。

幼 児：そう。何があるかなって見に来ました。

地 域：あ、そうなの。ありがとう。みんながきてくれて嬉しいわ。ほしいのがあるといいのだけど。

幼 児：これほしい。

幼 児：〇〇がいい。〇〇面白そう！

何が買えるのか店内を見ていき、候補の品物をいくつか選ぶ。

【話し合い】

どのお店で何をかうのかを撮った写真を見ながら話し合う。

幼 児：僕は絶対〇〇が買いたい。

幼 児：これもいいな、ほしいな。

保育士：お買物券は5000円分。何が買えるかな？

幼 児：全部は買えないね。

保育士：みんなで決められるかな？

多数決で、それぞれがほしい玩具に手を挙げていくが、自分の主張を曲げない幼児もおりなかなか決まらない。最初は自分たちが遊ぶためと選んでいたが、次第に意見を変える幼児も出てきた。

幼 児：みんなで遊べるのは、こっちじゃない？

保育士：自分たちだけではなく、他のクラスの友達も遊べるものを選ぶといいね。

幼 児：これだと小さい子は遊べないかもよ。

幼 児：これならみんなで遊べそうだけど、どうかな。

保育士が予算に収まるかを知らせながら幼児たちの中で伝え合い、それぞれが折り合いをつけて決定していった。

### 【商店街までの道のり、公共の場での約束】

商店街の歩道を真っすぐに歩くことや、店内ではたくさんの方がいるために声の大きさや周りの方への迷惑にならないような約束を事前にする。中には、興奮する幼児もいたため、個別に丁寧に伝えた。普段の散歩活動とは違い、全体的に落ち着かない様子もあったが、個別に知らせ安全に歩くこと、交通ルールを意識して歩くことを再確認した。

### 【玩具屋と本屋での買い物】

玩具と本のうち、どちらを買いに行きたいかを事前に決めて、5つのグループに分かれる。玩具を買う4グループは玩具の写真を見ながら買いに行った。

店内では事前に買うものを決めていたにもかかわらず、目移りしてしまう姿もあった。たくさん品物の中から友達と協力して見つけ、レジに行き「これください！」と声を掛けてお買物券を渡す。

地域の方に「ほしいものがあってよかったわ」「ありがとう」とお礼を言われ、恥ずかしそうにしている幼児もいた。「また来てね」と言われ、笑顔で返していた。

待っていた本屋グループは、店の外で「ちゃんと買っているかな？」と待ちながら店内をうかがう様子があった。購入後は、「買えた？」「買えたよー！」と嬉しそうに知らせ合っていた。

玩具屋の後に本屋に行った。本屋グループも写真を見ながら目当ての物を協力して探し、買い物をした。帰り道、幼児たちは「地域の方が『ありがとう』って言ってたね」と地域の方に喜んでもらえて嬉しそうにしていた。

園に戻ると、身支度を済ませて喜んで遊び始めた。これまでなかった玩具に興味津々の様子で、遊び方を知っている幼児が知らない幼児にルールや遊び方を伝えながら楽しんでいた。自分たちで選んで買って来たという満足感を得て遊んでいた。

### ③ 環境の構成

- ・手遊びの「八百屋さんゲーム」を親しんでいたが、様々な「〇〇屋さん」に替えて楽しみ、店や商店街についての興味や関心を広げイメージを共有する。
- ・地域に出かけ、知っているお店や自分なりのイメージも含めて簡単な地図をクレヨンで描き楽しむ。
- ・下見に行った際に、買い物をする店や具体的にほしい玩具の候補を写真に撮る。幼児たちが話し合う際に見られるようにする。

### ④ 意図

- ・かかしコンクールでいただいた商品券を使って自分たちで買い物をし、その体験を通して喜びや達成感を味わってほしい。
- ・自分のほしいものではなく、みんなで遊べるものを考えることや自分の意見だけでなく、友達の意見を聞き、受け入れ合う経験をしてほしい。
- ・身近な地域の環境について知り、地域に愛着を感じたり、興味や関心を広げたりしてほしい。

### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・話し合いの中で、自分の言葉で感じたことを率直に伝える。 言葉による伝え合い
- ・友達と互いの思いや考えを受け止め、受け入れ合い、折り合いをつけていった。

言葉による伝え合い

・地域の祭りに参加したことをきっかけに、商店街に行き、地域にあるお店のことを知り、地域の方と知り合ったりすることができた。

社会生活との関わり

・商店街を歩く時の交通ルール、店内での振舞い方等、公共の場でのマナーを知る。

道徳性・規範意識の芽生え

・玩具がいくつ買えるのか等、保育士と一緒に考える。

数量や図形、標識や文字への関心・感覚

## ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

まず、地域との関わりについて考えてみます。

園のある地域のイベントとして「かかしコンクール」があり、5歳児がかかしを作成し、出展することになりました。この時点では、賞をいただくことまでは想定していませんでしたが、賞や商品券もいただいたことによって、地域とも関わりを広げる好機と捉え、幼児たちに地域とのつながりや地域の方との関わりを体験してほしいと考え、買い物を計画しました。

普段、地域の方との関わりはあまりありませんでしたが、イベントをきっかけに、地域にはどのような店があり、どのような人がいるのかなどを知る機会になり、自分たちの住む地域の環境について、興味や関心を知るきっかけになりました。また、地域の商店街の人と触れ合い、買い物を喜んでもらい、自分たちが地域に役に立っていることの実感がわき、成功体験となりました。小学校就学を控えた幼児たちにとって、社会への視野が広がり、期待感や安心感へとつながったのではないかと考えます。

次に買い物について考えてみます。

いただいた商品券を使い、買い物をする体験は、自分たちでほしいものを考えて買うというわくわくする感覚があり、高揚感もあったように思います。

とりわけ、買うものを決める話し合いでは、自分の思いや考えを主張する幼児もいましたが、友達の意見も聞きながら、次第に受け入れ、よりよい解決策を考える経験となり、結果として満足感や達成感を得られたように思います。

こうした地域での買い物して、地域の方と触れ合って楽しかったという体験は、Ⅲ期以降の生活科の町探検等の際に、自分たちで知りたいことを調べたり自分の言葉でインタビューしたりする活動にもつながっていくのではないかと考えられます。



## 事例5 II期（5歳児10～3月）

できるようになりたい

—友達の良いところを伝え合う活動をとおして—

事例を読み取る  
キーワード

・健康な心と体  
・自立心  
・言葉による  
伝え合い

### <事例で伝えたいこと>

園では、4月から毎月、誕生児を対象に「よいところみつけ」と称して、その幼児の「よいところを」見つけ合い、幼児同士で伝え合える場を設けています。互いによさを認め合える時間を大切に、相手のことを思い、意見を伝え、聞いてもらう経験を重ねていきました。園の共有の廊下の壁面には、幼児の写真とともに「よいところ」を掲示する取組も行いました。

この事例では、この活動を継続してきた幼児の遊びの変化について考えてみます。

### ① 事例の概要

日々、好きな遊びを楽しんでいる中で、幼児は「〇〇ができるようになった」という喜びを味わい、保育士や周囲の友達に共感してもらうことで自信につながっている。友達の挑戦する姿を認め合う機会や場面があると「やってみようかな」とさらに様々な遊びを試す姿も見られる。

毎月1回の「よいところみつけ」の時間には、互いの幼児のよいところを見つけ、伝え、認め合うことで、友達の取組に関心をもって、自らも挑戦し関わる姿が見られた。

活動を継続していく中で、幼児たちがそれぞれ「〇〇できるようになりたい」「やってみたい」という気持ちが芽生え、挑戦する気持ちや前向きに物事を考え、諦めない気持ちや日々、意欲的に好きな遊びを楽しむ姿へつながった。

### ② 具体的な活動の様子

日頃から、けん玉やあやとり、コマ回し、紙芝居作り、廃材を活用した製作、鉄棒や短縄跳びなど、幅広く自分の好きな遊びを楽しんでいた。

「〇〇できるようになりたい」「やってみたい」という幼児に対して友達同士で教え合い、担任以外の様々な保育士との関わりをもち、自分たちなりに遊び方を考えて取り組んでいた。

【けん玉 ～けん玉名人になりたい～】

A 児：とめけんがうまくできない。

B 児：こうやってやるんだよ。（とめけんの技を見せて、成功する）

A 児：わかんないよ。どうやってやればできるようになるの？

B 児：こうやって、こう！（やってみせる）うまくいえないな…。

保育士：とめけんって難しいよね

C 児：糸をピンと伸ばして、玉をくるくる回してみて！そうするとよく入るんだよ。

C児が言ったようにA児は何度もやってみるが、うまくできない日々が続く。

【紙芝居づくり ～ストーリーを考えよう～】

A児：宇宙のお話、見る？

B児：なに？見せて。

・幼児数人で、A児の紙芝居を見る。

B児：ん～ちょっと難しかった。

C児：つままない。

A児：じゃあ、もう見せてあげない！

・A児が自作した紙芝居の内容がうまく相手に伝わらなかったため、A児は気を損ねながらも何度も作り変えたり、加えたりしていた。

A児：宇宙の紙芝居、見る人？

B児：見せてみせて。

・作り直したものをもう一度読む。

B児：いいね！ここも〇〇にするのはどう？

A児：ぼくはこうしたいんだよね。

B児：じゃあ、△△にしてみるの？

・B児も一緒に意見を出し合い、紙芝居づくりが続き、ようやく完成した。

【鉄棒 ～逆上がりの取組～】

A児：逆上がりができるようになりたい。

保育士：逆上がりやってみる？

A児：うん。

・保育士が体を持ち上げて、逆上がりの感覚を体験する。

保育士：どう？

A児：グルンって回る感じがする。もう一回やってみたい。

保育士：次はりんごのポーズを10秒以上できるかな？やってみよう！その後交代しようね」  
(体支持力をつけるため逆上がりとりんごのポーズは1セットで行うようにしていた。)

・A児は何度も鉄棒で逆上がりに挑戦している。毎日、鉄棒に取り組む姿を見ていた園長がタオルを持ってくる。

園長：タオルを使ってやってみるといいよ。

(A児の腰にタオルを回して、タオルの両端を鉄棒と一緒に握る。)

A児：できたあ。(タオルで逆上がりをしてみて、感覚を味わうことができた。)

・この後から、日々の遊びの中で友達や担任、他クラスの保育士との関わりながら、何度も逆上がりに取り組んでいた。

③ 環境の構成

- ・園の保育室や園庭、ホールなど様々な活動の場を他のクラスと連携を図りながら、時間を割り当て、じっくりと取り組める場所を確保した。
- ・保育室の近くにホールがあったので、使用予定時間以外は、時間を見つけて好きな遊びの中で広い場所を用意し、主に運動遊びやけん玉やコマ回し、廃材を使って大きな作品作りなど、

数日間、継続して取り組めるようにした。

- ・遊びに必要なものを幼児の取りやすい位置に用意して、朝夕の遊びの時間にも取り組めるようにした。

#### ④ 意図

- ・幼児の遊びへの興味を高め、楽しみながら意欲をもって取り組む姿へつなげたい。
- ・悔しさを感じながらも挑戦することを楽しみ、失敗を繰り返しても、周囲の励ましにより気持ちを切り替えて取り組めるようにしたい。
- ・日頃から褒められたり認められたりする経験を積み重ねていくことで、自己肯定感を高めていきたい。

#### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・好きな遊びを繰り返しながら、自分なりの目標をもって取り組む。 健康な心と体
- ・失敗を繰り返しながら諦めないで気持ちを調整して取り組み、保育士や友達と励ましながらか気持ちを高め合う。 自立心 言葉による伝え合い
- ・どうやったらできるか、できるようになるか、友達や保育士からアドバイスを受けて遊んでいくうちに感覚を掴んでいく。 思考力の芽生え

#### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例では、「できるようになりたい」「やってみたい」「うまくなりしたい」という気持ちで、諦めずに取り組もうとする姿を後押しする関わりが見られた場面を抜粋しています。

進級時に友達とのトラブルも多く自分の思いを通そうとする幼児たちもいますが、担任としては、幼児たちに「それぞれの好きな遊びを存分に楽しんでもらいたい」「互いにより刺激を与えながら興味へとつなげてもらいたい」という思いがあり、「よいところみつけ」を始めました。互いに友達のよさを自分なりに探して言葉で伝え合う場をつくったことで、日常生活の中でも「〇〇さんはけん玉が上手だね」「どうやってやるの?」と教え合う姿が増えていきました。

この実践をとおして、友達や担任だけではなく、園長や他クラスの保育士も幼児の意欲へつながらるような前向きな言葉を掛け、成功体験を味わう感覚を伝え、喜びや失敗に共感し、繰り返し取り組む意欲を支え、遊びを楽しむ姿へつなげていく援助の必要性を感じました。

幼児の得意なことは一人ひとり異なります。得意なことや好きなことに取り組む過程では、うまくいかないこともあります。しかし、その意欲を支えて、幼児が繰り返し挑戦し続け、自らの力で得た達成感や充実感を味わう体験は、生きる力の基礎となっていくと思います。

自分から意見をはっきり伝える幼児もいれば、みんなの前では遠慮してしまう幼児もいます。その際、保育士が個別に関わりながら、「自分の気持ちが相手に伝わった」という経験もまた、小学校以降の学びの場で、自分の意見を伝える姿や挑戦する気持ちへつながらるのではないかと考えます。

こうした経験をとおして育まれた力が、Ⅲ期では、自分の思い通りにならないことがあっても自分で気持ちを切り替えたり、悔しい気持ちになっても周囲の人からの励ましや応援で意欲を取り戻したり、前向きに物事に取り組む姿へつなげていくと考えます。

**事例6** Ⅱ期（5歳児10月）  
同じ人数じゃないとだめなの？  
—リレーに必要なルールについて考える—

事例を読み取る  
キーワード

・言葉による伝え合い  
・協同性  
・道徳性・規範意識の  
芽生え  
・数量や文字への  
関心・感覚

<事例で伝えたいこと>

Ⅱ期の初めの時期には、友達と一緒に遊びを進めていく楽しさを感じ繰り返し遊びを楽しむ中で、次第に協同して遊ぶようになり、きまりの必要性を感じながら、自分たちで遊びを進めていこうとする姿が多く見られるようになってきます。そのため、友達との関わりを深め、共通の目的に向かって、学級やグループの友達と力を合わせる遊びを取り入れています。

この事例では、遊びに必要なルールについて、友達と考える中で、数に関する興味や関心、感覚が育まれていく過程について考えます。

① 事例の概要

友達と誘い合いリレーを繰り返し楽しむ中で、勝敗を意識する姿が見られるようになった。教師は、遊びの様子を見て、勝敗のある遊びを楽しむために必要なルールについて幼児の気付きが共有できるよう話し合いの機会をつくったところ、これまで楽しんできた経験を基に、各チームの人数について話し合う幼児の姿が見られた。その後、その話し合いをきっかけに自分たちで必要なことを確認してから遊び始める姿が見られるようになっていった。

② 具体的な活動の様子

昨年度、5歳児と一緒に楽しんだ経験から、好きな遊びの中で繰り返しリレーを楽しんでいた。初めは、友達と一緒にリレーコースを繰り返し走るエンドレスリレーをして、体を動かすことを楽しんでいたが、次第に2チームに分かれ、速さを競うようになり、勝敗を楽しむ遊びに変わっていった。友達を誘い、自分たちで遊び始めるが、思うようにならない事があると、途中で遊びをやめたり困っていることを教師に知らせたりする姿が見られるようになった。

【3人でリレー遊びをする場面】

A児：チームに分かれようか！私は、白チームがいい。

B児：私も白チームにしよう！

C児：じゃあ、僕は色チームにするね。

全員：位置について。用意、スタート！

各チームに分かれてコースを走る

A児：Bちゃん、はい！頑張れ！（バトンを渡す）

C児：ゴールした！色チームの勝ち！

A児：ずるいよ。まだBちゃん、走ってないよ！

C児：ずるくないよ！だって色チームは1人だけだもん。

B児：じゃあ、私は誰と走るの？C君、もう一回走ってくれない？  
C児：えー。2回も走ったら疲れちゃうよ。遅くなっちゃう。  
A児：じゃあ、Dちゃん誘ってみる？  
C児：そうしよう！そうしたらBちゃんが一人で走らなくてもいいもんね。

その後、教師は、学年でリレーをすることを提案し、学年の友達とルールを確認する機会をつくと、勝敗のある遊びを楽しむために必要なルールについて考えを出し合う姿が見られた。

#### 【学級全体の話し合いの場面】

教師：先生、さっきリレーをして楽しかったから、今度は、すみれ組とゆり組でリレーをやってみようよ！

A児：楽しそう！やりたい！

B児：だけど、ゆり組は、今日3人も休み。勝てるかな…。

A児：すみれ組は、お休みがないから20人もいる！

教師：じゃあ、今日はゆり組が15人ですみれ組が20人ってことだね！

C児：すみれ組とゆり組が同じ数で走らないとだめだよ！

教師：なんで戦うチームの人数が同じじゃないとだめなの？

C児：だってすみれ組の方が走る人がいっぱいいたらすみれ組が負けちゃうもん。  
一人で走らないといけなくなるし。

教師：確かに。ゆり組の方が少ないからすぐにゴールしちゃうね。

A児：じゃあ、ゆり組で2回走る人は何人なの？

教師：ビブスを着てみると、2回走る人が何人必要か分かるかもね。

B児：そうだね。1番から着てみよう！

各クラス1番から順にビブスを着る。

A児：ビブスが5枚余ったから、5人だ！

教師：今日は、ゆり組が5人少なかったんだね。2回走る5人は、この余ったビブスを着ればいいんだ！

B児：じゃあ、私がビブスを2枚着て2回走る人になる！

2回走る5名が決まる。

教師：人数が少ないと早くゴールしちゃうもんね。始まる前に人数を確認した方が良いんだね！

話し合いを経て、勝敗のある遊びを楽しむために必要なルールとして、参加人数を確認することの大切さに気づき、遊びの中でも同じ人数にすることを意識し、友達と一緒に繰り返し楽しむようになっていった。

### ③ 環境の構成

- ・ビブスを提示し、人数の差が視覚的に分かるようにした。
- ・学年全体で行う活動後には、いつでも使えるようにビブスを提示しておいた。
- ・使用しないビブスは、ビブスの数字と同じ数字が表示してある箱に入れるように環境を整えておき、必要なときにすぐに遊びに使うことができるようにした。

#### ④ 意図

- ・一緒に遊ぶ友達の思いを知り、みんなで楽しく遊ぶために必要なことを考えながら遊びを進めていってほしい。
- ・人数の違いに気づき、自分たちで人数を合わせたり、調節したりし、数量や文字に親しむ体験を重ねてほしい。

#### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・自分の気持ちや考えを伝えたり、友達の思いを受け止めたりする 言葉による伝え合い
- ・友達と共通の目的やイメージを楽しむ 協同性
- ・勝敗のある遊びについて必要なルールについて考えたりしながら遊ぶ 道徳性・規範意識の芽生え
- ・数量や文字に興味・関心をもち、必要感に基づき活用していく 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

#### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例では、自分たちで遊びに必要なルールを考え、決めていく過程の中で、数への興味や関心、感覚が育まれていく過程を追った事例です。

5歳児の幼児たちは、これまでの遊びや生活の中で、園内の遊具や用具などのものの使用や片付け、自分たちで育てたトマトやキュウリなどの収穫、欠席の友達の人数調べ、二手に分かれ行う鬼遊びでの人数調整など、様々な場面で、必要感を伴って数を数える機会があり、数への感覚を豊かにしてきています。

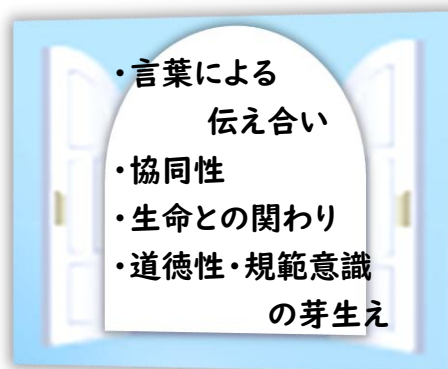
そして、Ⅱ期における幼児の姿として、共通の目的に向かって学級や学年の友達と一緒に遊びを進めていく中で、必要なことや自分たちでできることを考え、友達と思いや考えを受け止め合いながら、遊びを進めていくことを楽しむ姿が多く見られるようになってきています。

教師は、遊びに必要なルールを決める際には、自分たちで必要感を伴って自分たちで気付いてルールを決めて遊びを進めてほしいと考え、あえて最初から「同じ人数にした方がよい」というルールにすることは伝えませんでした。幼児がいつか気付くだろうと予想しながら機会を待って、幼児の言葉を丁寧に聞き、必要感を感じることができきっかけとなる言葉を掛けることにしました。環境として、いつでもリレー遊びができるように数字が書かれているピブスを用意しておくことで、結果として、数を数えることや両チームが同一人数になるようにすること、前から何番目に走るといふ順番などが、実感を伴って理解することができ、リレー遊びを楽しむ体験となりました。実感を伴って理解した経験は、小学校入学当初の「かずのとびら」においては、自信をもって学習に向かうことができ、Ⅲ期以降の学びの基礎になるのではないかと考えます。





**事例7** II期（5歳児11月）  
カメがない  
—生き物との関わりを通して—



### <事例で伝えたいこと>

この事例では、年長児が当番活動で日々世話をしているカメがいなくなってしまうとき、みんなでどこにカメがいるか搜索したり、カメを見付けるためにはどうしたらいいか考えたりした事例です。カメがいなくなってしまうことは偶発的な出来事でしたが、大切に育てていたカメを思いやる気持ちを育んだり、自分たちにできることをみんなで考える過程を深めたりします。

#### ① 事例の概要

進級したときから、当番活動でグループごとに2匹のカメの餌やりや掃除を毎日張り切って取り組んでしていた。11月頃、たらいにいたはずのカメのうちの一匹が突然いなくなりました。どうしていなくなってしまったのかが分かり、学級のみんなで探したが、見付からなかった。カメはどこへ行ってしまったのか、これから当番活動でどんなことに気付けたらいいかについて話し合いをしていった。

#### ② 具体的な活動の様子

昼食前、5～6人のグループに分かれて当番活動を進めていた。カメのお世話担当のグループも「たらいを磨きたわしを持ってこよう」「今日はカメ、誰が持つ？」などと話し、役割分担をしながら当番を進めていた。当番が終わり、使った道具のしまい忘れがないか、たらいの中にある石が真ん中に置かれているか（端に置いてあるとカメがのぼって逃げてしまうため）、確認をして当番を終えた。

午後に、園庭で遊んでいるとA児がカメがないことに気付いて「たらいにカメがない！」と驚き、他の幼児も集まってきた。当番を担当していたB児は「石が端っこになっている。なんで？」C児も同じく「当番のときにチェックしたよね？なんでだろう。石を動かしちゃったのかな？」と呟いていた。教師もその場で話を聞き、「当番のときにはチェックをしたんだね。カメが幼稚園のどこかにいるかもしれないね」と言葉を掛けた。すると、A児は「じゃあ幼稚園を調べよう！」B児「カメは狭いところが好きらしいよ」C児「暗いところとかも見てみよう」と伝え合う姿が見られた。

すぐに、幼稚園内でのカメ探しが始まった。A児は「園庭を見てみたけどいないよ」と知らせ、B児も「他の先生にも聞きに行ってみよう」と呼びかけていた。自分たちだけでは見付かりそうにないことに気付き、他学年の教師に聞きに行ったり、職員室にも行ってみたりした。教師からは「Bくんが言っていたみたいに、狭いところが好きって聞いたことがあるからいろんなところの“すきま”を探してみたらどうかな？」と、探すためのアドバイスをもらい、再び園内を探してみた。しかし、カメは見付けられず、降園時刻になってしまった。さらに雨が



降ってきたことで、園庭を探すことは難しくなってしまった。「どうしよう…」「でも雨が降っているから、もし外にいたら喉は乾いてないかな？」など、カメのことを心配する思いを友達同士で伝え合っていた。教師が「もり組のみんなにも相談してみようか。何か良いアイデアが見つかるかも」と声を掛けると、「そうしてみよう！」「みんなで考えたほうが、いろんなアイデアがあるかも！」と話していた。

降園前の活動は、カメの話題でもちきりになった。教師が「Aくん、Bくん、Cくんが何か話したいことがあるみたい」と話を切り出し、当番活動のときからカメがいないことに気付くまでの間のことをみんなで振り返り、いつカメがいなくなってしまったか、どこにいそうなのかを話し合った。他の幼児が「当番活動の時にさ、ちゃんと石は真ん中に置いたの？」と聞くとB児・C児は「置いたよ」「うん、僕も見ていたよ」と答え、当番活動の時にはカメがいたこと、石にのぼって逃げないように石を真ん中に置いたことを確認できた。教師が「じゃあどこに行ったのかな？」と問いかけると、「きっとまだ幼稚園の中にいるよ」「1階のテラスにたらいがあったから園庭じゃない？」「園庭だったらそのまま外に出ちゃったりしないかな？」など、いろいろな意見を出し合った。B児は「園庭も1階の部屋も2階の部屋も探したよ。でもいなかった」と少し悲しそうに知らせていた。他の幼児もその姿を見て、「明日また見てみようよ」「そうしよう、みんなで探したら見付かるかもしれない！」とB児を元気づけ、その日は降園した。

#### <翌日>

朝からB児、C児は「カメいた？」と教師に聞きに来た。教師は「先生も探してみただけいなかったんだ」と話すと、「じゃあもう一回探してみよう」「まだ探せていない場所があるかもしれない」と話していた。その姿を見て、他の幼児も「私も一緒に探す！」「探検隊だね」「双眼鏡を作ってよく見えるようにしよう」などと話しながら、みんなで探すことになった。

しかし、この日もカメを見付けることはできなかった。そこで教師は、もう一度学級のみんなで集まる時間を作り、話し合いができるようにした。教師が「カメをずっと探してみただけど、やっぱりどうしても見付からなかったんだ。みんな、どうしたい？」と問いかけると、「まだ探してみる？」「でももう全部探したよね」「やっぱり幼稚園の外に出ちゃったのかな…」など、感じたことを思い思いに伝え合っていた。すると、A児が「探していますってチラシを作ったらどう？みんなが見てくれるかも！」と提案し、「ネコとかで見たことある！」「じゃあカメの絵を描いて、みんなが分かるようにしよう！」と他の幼児も意見を出し合っていた。そして、『カメを探しています』というチラシをつくり、園長先生や他学年の教師に渡して、「幼稚園に貼ってください」と依頼をした。「これで見付かるといいね」「早く戻ってきますように！」と気持ちを伝え合っていた。その後もいなくなったカメのことを日々気にしながら、もう一匹のカメの世話を丁寧に行っていた。

修了間近、カメを見付けることはできないまま、幼児たちの修了が近付いてきた。「カメ見付からなかったね」「でもきっとどこかで元気に過ごしているよ！」「残っているもう一匹のカメを大事にお世話しよう」「見付けてあげられなくてごめんね」「寒くて風邪、引いていないかな」などと伝え合い、カメの無事を祈ったり、今の自分たちにできることを考えたりして過ごす姿が見られた。

自分たちの次に年長になる年中組の幼児に当番活動を引き継ぐ時期になった。教師は年長児が次へ思いを託す気持ちをもてるように「カメはきっと元気に過ごしているよ、見つからなかったのはとても残念だけど、しょうがないときもあるね。」「みんなはカメの気持ちをとても考えながらお世話をしていたけど、次の年長さんに、カメのお世話の仕方をどうやって教えようか?」と問いかけた。すると、「石は真ん中に置くことを絶対伝えなきゃ!」「あと、カメをまだ探していることを伝えたいな。僕たちが小学校に行った後、戻ってくるかもしれない!」と言い、引き継ぎたいことや経験したことを伝え合っていた。年中組の幼児に自分たちの思いを引き継ぐことができ、安心して修了することができた。



### ③ 環境の構成

- ・カメ探しをする中で、一人ひとりがカメのことを思いながら考え、必要感をもって取り組めるように声を掛けたり、教師も一緒に考えたりした。
- ・友達のアイデアや意見を受け止めたり、丁寧に聞いたりできるように集まるときは円形になって顔が見られるように集まり、教師自身も教師としてではなく同じ話し合いをしている仲間として幼児と同じ椅子に座り、みんなで集まって考えることができる空間、時間、場を作った。

### ④ 意図

- ・カメという生き物との出会いの中で、当番活動を通して一人ひとりがカメがいなくなってしまったことを自分事として考え、解決策を見出していく力を培ってほしい。
- ・生命との関わりを通して、生き物を大切に飼育しようとする気持ちを一人ひとりの幼児なりにもち、当番活動に責任をもって取り組んでほしい。

### ⑤ 幼児に育てている力（「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」から省察する）

- ・いなくなったカメを見付けるという共通の目的に向かって、意見を出し合ったり、友達と協力して探したりする。 協同性
- ・自分の思いや考えを相手に伝わるように話したり、相手の思いや考えを受け止めたりしながら、話し合いを進める。 言葉による伝え合い
- ・大切に飼育していたカメがいなくなってしまった悲しさを感じながらも、今の自分たちでできることは何かを考え、友達と力を合わせて行動する。 生命との関わり 協同性 言葉による伝え合い
- ・当番活動を通して、自分たちが経験したことや失敗してしまったことを踏まえて約束事を守っていこうとしたり、次年度の年長児に伝え、引き継ごうとしたりする。 道徳性・規範意識の芽生え

#### ⑤ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

まずⅠ期の振り返りとして、幼児たちは4月の年度当初から年長児のみができる当番活動を張り切って行い、幼稚園の役に立つことや感謝されることに満足感や達成感を感じながら取り組んでいました。始めは目新しさからほとんどの幼児が率先して取り組んでいた当番活動でしたが、少しずつ慣れてきた頃には、当番活動が面倒でやりたがらない姿や、「(当番活動よりも)遊びたい」と言う姿があり、当番活動の必要性がまだ分からない様子も見られていました。その度に、どうして当番活動があるのか、何のために当番活動をしているのか、みんなで話し合いながら活動を進めていきました。「幼稚園がきれいになると気持ちが良いよね」「幼稚園の中で一番お兄さん、お姉さんの私たちだから、当番活動はできるんだよね」と伝え合うようになり、当番活動の必要性にみんなが少しずつ気付いていくようになりました。

Ⅰ期で当番活動の必要性を感じてきていた幼児たちが、Ⅱ期で偶然的に起きた出来事（カメがいなくなってしまうこと）に直面し、課題解決を求められたのが、この事例と重なります。教師が意図した活動ではありませんでしたが、生命との関わりや幼児たちが大切に飼育していたカメが突然いなくなったことに向き合うことができるように、学級のみならずでも話し合う時間を設けたり、解決策を考えたりする時間を十分に確保しました。結果的にカメを見付けることはできませんでしたが、カメのことを思いやり、遊びの時間中探し続けたり、教師に聞いたリ、チラシをつくったりするなど、自分たちなりにできることを考え、考えた解決策を実践してみる姿が見られました。幼児にとって「責任」という言葉は重く考えてしまいがちですが、幼児たちなりに責任をもって日々の当番活動に取り組み、責任を感じることで強いる必要はないとしても、カメがいなくなってしまうことを真摯に受け止め、何とか解決しようとする力がこの出来事で育まれていったのではないかと考えられます。

この事例からⅢ期に向けての見通しを考えていくと、自分の思いを相手に分かるように言葉で伝えようとすることや生命の大切さを考えたり、大切にしようとしたりする道徳性・規範意識が育っていくと考えられます。また、必要性を感じながら当番活動に取り組んだことで、その後のグループでの活動にも一人ひとりが目的をもって取り組んでいく力が育っていくのではないかと考えます。その中で、友達と力を合わせて一つのことを成し遂げていく達成感や同じ目的に向かって取り組んでいく姿勢につながってほしいと感じています。生命との関わりは今後も必ず続いていきます。一人ひとりが経験したことを心の片隅に覚えておき、Ⅲ期、またはそれ以降の時期で生かして行ってほしいです。

**事例8** Ⅱ期（5歳児11月）  
どうしたら勝てる？  
—友達のよさに気付く—

事例を読み取る  
キーワード

・協同性  
・言葉による  
伝え合い

<事例で伝えたいこと>

この事例では、他園との交流でドッジボールをするときに、クラスで内外野や作戦の話し合いをする中で、友達の思いを知ったり、よさに気付いたりする姿について考えてみます。

① 事例の概要

他園とドッジボールをすることになり、勝つために作戦を話し合うことになった。クラスの中にはドッジボールが得意な幼児、すぐにボールに当たってしまう幼児がいる。話し合いの中で、友達のよいところが見えてきて、自然に役割分担ができてくる。

② 具体的な活動の様子

クラスで楽しんでいるドッジボールを他園との交流で一緒に遊ぶことになった。保育士が「今度〇〇保育園とドッジボールをすることになったよ」と朝の会でみんなに伝えると、ドッジボールが得意なA児は「ぜったいに勝ちたい！」と言う。保育士が「じゃあ、みんなで作戦会議をしよう。」と提案する。保育士がホワイトボードに大きくコート絵を描き、名前のマグネットを用意し、話し合いを始める。保育士が「元外野（最初に外野を守る人）は何人にする？」と聞くと、幼児たちがホワイトボードのコートの図を見ながら指さし数え「1…2…3…、3人にしようよ」と言う。保育士が「じゃあ元外野は3人でいい？」と聞くとみんなが頷く。A児が「僕は元外野がいい」と言う。B児が「Aくんはボールを当てるのも取るのも上手だから、内野がいいと思うよ」と言う。A児が「わかった。僕は内野にする。じゃあ誰が元外野になる？」とみんなに聞くとC児が「僕はボールが取れないから外野にする」と言う。するとD児が「でもCくんは逃げるのが上手で、いつも最後まで残っているよね」と言うとE児も「ドッジボールは最後まで当たらないで残っている人が多い方が勝ちだから、Cくんが内野にいた方がいいよ」と賛同する。「じゃあ、Fちゃんも逃げるのが上手だから内野ね」「外野はボールを投げるのがうまいBくんがいいね」とそれぞれが、友達の良い所を言い始める。保育士が幼児の声を聞いてホワイトボードに名前のマグネットを貼っていく。全員の名前を貼ったところで、F児が「(交流する) 〇〇保育園にお手紙を書こうよ」と提案する。みんなが「いいね！Fちゃんは字が書けるから書いて」「絵はGちゃんが上手いから書いてもらおう」と言って交流する保育園に手紙を書き始めた。

③ 環境の構成

- ・日頃から園で楽しんでいるドッジボールを他園と交流で遊ぶ機会をつくった。
- ・ホワイトボードと名前のマグネットを用意し、幼児たちが目で見てわかるようにした。

④ 意図

- ・クラスみんなで力を合わせて、同じ目的に向かう経験をしてほしい。
- ・人には得意不得意があることを知り、友達のよいところに気付いてほしい。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・友達と一緒に目的を持って話し合いをしたり遊んだりする 協同性 思考力の芽生え
- ・自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする 言葉による伝え合い
- ・ホワイトボードの文字を読んだり数を数えたりする

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

勝って嬉しい、負けて悔しいという気持ちはⅠ期の運動会のリレーなどの経験から何度も味わっている。負けた時はその都度「なぜ負けたのか?」「どうしたら次、勝てるのか?」を話し合うようにしてきた。この事例では「勝つためにはどうしたらよいか」をクラスみんなで話し合う機会となった。ドッジボールではボールを上手く投げることができる子、たくさんキャッチできる子が活躍し目立つ。ドッジボールで遊ぶ中で、最後まで当たらないで残っている子がいると勝ちに繋がることを経験から知っている。また、誰がいつも最後まで逃げ切っているかも見ている。みんなでドッジボールに勝ちたいという同じ目標を持つことで、お互いを認め合い、話し合うことができた。この経験は今後、みんなそれぞれ得意なこと、苦手なこと、良いところがあるということを意識できるようになり、小学校に進学して新しい出会いがある中で人間関係の構築、人権を尊重することの基盤となる。

## 事例9 II期（5歳児11月）

今日はゾウにしよう！

—生活や遊びの中で、様々な体の動きを  
意識する—

事例を読み取る  
キーワード

・多様な体の動き  
・安全な生活

### <事例で伝えたいこと>

この事例では、幼児への安全指導をとおして、日々の生活の中で幼児が体の動きを意識して行動する姿につなげていくことについて考えてみます。

#### ① 事例の概要

動物園に遠足に行ったことをきっかけに、作品展に向けて動物園作りをする中で、安全指導を兼ねて「電車歩き」を提案したことをきっかけに、日頃楽しんでいる「ドンジャンケン」に幼児が動物の動きを取り入れ、自分たちで決めたルールで遊ぶようになった。

#### ② 具体的な活動の様子

10月半ばに動物園に遠足に行き、様々な動物を見て、その動きや特徴に興味・関心をもった。学級や学年の活動の中で、遠足で見てきた動物をイメージしてなりきって動いたり声を出したりするなどの表現遊びを繰り返し楽しんだ。また、グループで決めた動物を作り、動物園作りをすることになり、自分たちが動物や飼育員になったつもりで動く姿が見られていた。

動物園をテーマに作品展に向けた活動を進めている中、廊下を走ったり、すれ違いざまに幼児同士がぶつかったりすることが増えていたため、教師が幼児自身で安全を意識して行動できるように、「今日は電車で動物園に出発！電車歩きで左右の安全を確認して行動しよう。」と投げかけた。初めは戸惑っていた幼児たちだったが、気が付くと互いの姿を見合いながら、一日をとおして手を汽車の車輪のように動かしたり、運転手のように左右確認をして歩いたりする姿が見られた。

翌日、登園してきた幼児と、「今日は何に変身しようかな？」と話すと、「今日はゾウにしよう。」と言う幼児につられ、周りの幼児が大股で大きく歩く動きを始めた。そして、好きな遊びでは、A児がドンジャンケンをしようと周りの幼児に声を掛けた。

A児：ドンジャンケンやろうよ！ゾウ歩きで行くね。

B児：どういうこと？

A児：ゾウ歩きでドンジャンケンをするってこと。（と大股で歩き始める。）

B児：えー、それじゃあ負けちゃうよ。

A児：大きく歩けば大丈夫。

B児：いいけど。

C児：私はリスになる。

B児：えー、動物ジャンケンってこと？

D児：チーターなら速いよ。

教師：へえ、そういうことになったの？いろんな動物がいるから速さも動きもいろいろだね。

B児：分かった。じゃあ、動物で動かなきゃダメってことね。ジャンケンして負けたら戻るの是一緒だよ。

- ・参加した幼児それぞれが、A児につられて様々な動物になり、ドンジャンケンをすることになった。速さを競うのが楽しいドンジャンケンだが、動物になって動くことで様々な動きに挑戦したり、集中して線をたどって動いたりして遊ぶ姿が見られた。

### ③ 環境の構成

- ・今ある環境(動物園づくり)を生かして、幼児が動きのイメージをもちやすくする。
- ・教師の発言はきっかけにとどめ、幼児の表現や考えを否定せず、十分に認める。

### ④ 意図

- ・短い時間でもじっと座れなかったり、何かに寄り掛かったりして体幹の弱さが見られるため、一斉活動の中で取り入れていた「体づくり運動」を日々の生活の中でも取り入れ、幼児が楽しみながら様々な体の動かし方を体験してほしい。
- ・自分の体の動かし方や場に応じた動き方を意識し、幼児が自ら安全に気を付けて行動できるようになってほしい。

### ⑤ 幼児に育てている力 (「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」から省察する)

- ・自ら安全な生活をつくり出そうとする。**健康な心と体**
- ・多様な動きを楽しむ。**健康な心と体**
- ・友達と遊びのルールを決め、ルールに沿って遊ぶ。**道徳性・規範意識の芽生え**

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと (Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り)

就学に向けて、幼児に自分の行動を意識させ気を付けさせたいという思いから、「危ない」「走らない」等の注意の声掛けがどうしても多くなってしまいう中で、「電車歩きで安全運転」という声掛けをしたことで、幼児が自ら安全に気を付けて行動するきっかけになりました。また、動物園作りをしていたことから、幼児が動物の動きをイメージしやすく、教師の投げかけに対して幼児から「ゾウ」のイメージが出てきたことがきっかけになり、遊びの中で自分たちでルールを決めて自分の動きを意識して遊ぶ姿が見られました。スピード感が楽しいドンジャンケンですが、幼児が決めたルールに沿って、楽しみながら体の動きを意識して遊ぶことにつながり、その面白さが幼児の中で伝わり合い、みんなで決めた遊びのルールに従い一緒に遊ぶ楽しさを感じる機会になりました。

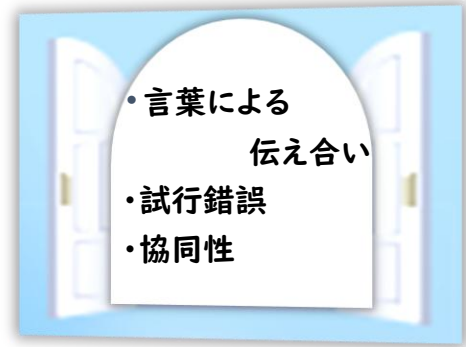
Ⅰ期を振り返ると、Ⅰ期から表現遊びや体づくり運動として、学級や学年での一斉活動の中でクマやウサギなどの動物のイメージで、這う、跳ぶ、片足立ちなど様々な動きを経験することを繰り返し取り入れて、その中で個々の動きを認めたり友達の動きに目を向けさせたりし、表現を楽しむことが大切だと思います。また、体幹の弱さから、止まって座っていられなかつ



たりすぐに何かに寄り掛かって立ったりする姿を改善するためにも、様々な動きをとおして自分の体の動きを意識できるようにすることが必要であり、幼児自身が様々な動きを楽しみ、やってみようという気持ちをもつことが大切だと考えます。

これらのⅡ期の経験がⅢ期にどのようにつながっていくのか考えてみます。生活の様々な場面で、体を意識して行動したり遊んだりする中で、幼児は自分の体の動かし方や、得意な動きや苦手な動きなどに気付くようになるとともに、友達の動きにも目を向けるようになります。すると、「こうやってみたらどうかな。」「〇〇さんの動き方、面白いな。」「こんなこともできそうだ。」などと、自分なりに目標を決めて挑戦したり、友達のよさに気付いたりすることの土台となっていくのではないのでしょうか。それが、体を動かすことの楽しさや挑戦意欲となり、Ⅲ期には、体育の学習の中で自分の目標に向かって頑張る力や自信となったり、友達のよさを認めたりすることにつながっていくと考えます。また、体の動きを意識することは、安全に生活をするにもつながると考えます。Ⅱ期にじっくりと楽しみながら自分の体の動きに向き合う経験を重ねることで、「こんな動きをしたら危険だ。」「こうすれば、みんなが安全に生活できる。」といった安全への意識や予測、自分の身のこなし方など、自分たちで安心・安全な生活を整えていくことにつながっていくと考えます。そのために、教師は時には手本となり、時にはさりげなくつぶやいたり遊びに取り入れたりしながら、幼児が自分で気が付き意識できるように、様々な動きの体験の機会や環境を提示していくことが大切だと考えます。

**事例8** II期（5歳児11月～12月）  
高く積んでみようよ  
—空き箱を使って高く積むゲーム—



<事例で伝えたいこと>

この事例では、遊びで使っている空き箱を使い、チームで箱をできるだけ高く積んでいく中で、箱を高く積むためにはどのように箱を組み合わせたらよいのか、うまく積みあがらなかったのはどうしてなのかを相談し、試行錯誤している幼児の姿について、理解を深めます。

① 事例の概要

遊びの中で使っている箱で、できるだけ高く積むゲームを学級のみで行った。2チームで行い、仲間とどのように箱を高く積んでいくか、どの箱を使うかを話し合いながら、活動に取り組んだ。話し合いの時間を『作戦会議』と題し、自分の役割を伝えたり、仲間と試行錯誤したりしながら、次のゲームに向けて話し合いを進めた。

② 具体的な活動の様子

学級のみで行うゲームをする前、遊びの中で、いろいろな箱を組み合わせて自分なりに高く積むことを楽しんだり、一緒に遊ぶ友達と同じように積んだりすることを楽しんでいた。その姿から、学級のみでも楽しめるように『箱んでハイタワー』というゲーム名にし、2チームに分かれて楽しめるようにした。初めは時間制限も作らず、いろいろな箱を組み合わせて自由に箱を積めるようにしたが、公平にするために箱の種類、使う道具（テープ、新聞紙など）を揃え、ルールを守りながらチームで競い合えるようにした。そのルールをもとに繰り返し遊ぶ中で、チームの仲間と協力したり、試行錯誤したりすることを繰り返した。

**ルール**

- ・ 2チームに分かれ、制限時間内（3分間）に陣地内に箱を高く積んだチームの勝ちとする。
- ・ 2回戦行う。1回戦後に作戦会議（15分ほど）を行い、新たに箱をつなげたり、箱の積み方を相談したりする。
- ・ 積む箱は事前にチームで相談して、一定の高さ以下につなげた箱を使う。つなげた箱の高さは22Cm以下とする。（中型積み木1つ分）
- ・ これまでの活動で各チームが作戦会議を重ね、つなげた箱も使用することができる。

<場面1>

遊びの中で好きな空き箱を使って箱を高く積めるように遊んでいる。

A児：どれくらい高く積めるかやってみようよ。

B児：いいね、どの箱にしようかな。

教師：こんな箱もあるよ、これもいいね

A児：高くなってきた！

B児：待って！倒れそう！

A児：倒れちゃった…。箱が軽いからかな？先生、中に新聞紙を詰めたほうが倒れないから、新聞紙を使ってもいい？

教師：いいよ。たしかに重くすると倒れにくくなるかもしれないね！

B児：私もやってみる！

A児：くしゃくしゃにしてから詰めよう

B児：ぎゅぎゅぎゅってやるといいね

それぞれが積み上げた箱を倒れにくくするためにどうしたらいいかを考え、試している。

その様子を見て、周りの幼児も一緒に箱を積んでみたり、学級のみんなで、どれくらい箱を高く積めるか試してみたりした。

## <場面2>

その後、2チームに分かれて学級のみんなで『箱んでハイタワー』のゲームを行った。A～C児が白チーム、E～G児が緑チームで取り組んだ。

### 【作戦会議】

<白チーム>

A児：どの箱を使う？

C児：牛乳パックで揃えて同じ形で積んだほうが倒れにくいんじゃない？

B児：それで高く積んでみようよ！

教師：いいアイデアが出てきたね。同じ箱を重ねると、たしかに大きさが揃って積みやすいよね。どんなふうに積むの？

B児：こうやって、重ねて積んでいくの。角と角を揃えるんだよ！

<緑チーム>

D児：(相手チームの話聞いて) やっぱ牛乳パックが倒れにくいよ。

E児：いいこと思いついた！ジェンガみたいに積んだらどう？

F児：ジェンガって？

E児：こうやって三つ揃えたら、今度は違う向きで積んでいくんだよ。

D児：いいね！

教師：たしかにジェンガみたいだね！ぐらぐらしなさそうだね。そろそろ作戦会議の時間が終わりそうだから、その作戦でまずはやってみようか。

D児：相手チームよりも高く積もうね！

緑チーム：えい えい おー！

始めのうちは、制限時間は幼児に提示せず、教師が頃合いを見て終了の時間の声掛けをした。

すずらんテープで長さを測り、互いのチームと比べ、長いほうが勝ちだと分かるとチームのみんなで喜んだり、負けたチームはどうしたらもっと箱を高く積めるか考えたりした。

『箱んでハイタワー』を学級のみんなで何度か行い、試行錯誤を繰り返し、ルールの中で遊ぶことを楽しむようになってきた。また、友達と意見を伝え合う大切さも少しずつ分かってきた。ルールの中でどのような作戦で箱を積むか、どうしたら高く積めるかを考えている。

～1回戦後の作戦会議～

<白チーム>

A児：重い箱が乗かると、絶対倒れるよね

B児：じゃあ、重い箱から積んで、最後は軽いのにする？

C児：じゃあ私は重い箱を運んでいくね

他の幼児：そしたら僕は箱をつなげる！

私は箱をおさえるね

教師：いいね。そういうのって役割分担っていうんだよ。どこを担当するかみんな考えているんだね。Bちゃんが「時間がないよ！」って伝えてたのも大事だったね。

A児：そうだ！時間を伝える人もいないとぎりぎりまで頑張れないね。

C児：そしたら箱を運びながら時間も見てみる！

A児：頼んだ！

教師：みんなで声を掛け合ったら、次は緑チームに勝てるかもしれないね。友達に伝えようって気持ちが大変なんだね。ちょっとでも気が付いたことがあったら、友達に教えてあげてね。

B児：みんな、たくさん話そう！

C児：うん、気が付いたことがあったら言うね！

<緑チーム>

D児：僕が箱を積む役をやってもいい？

E児：いいよ。Fちゃんはどうする？

F児：じゃあ箱がぐらぐらしないか見るね。Gちゃん、一緒に見てもらっていい？

G児：うん、いいよ。（うまく思いを伝えることが難しい。）

教師：FちゃんとGちゃんが協力して点検をするんだね。どうやって見るの？

F児：あのね、箱と同じ高さになって見るの。そうするとぐらぐらしている場所が分かる！あとはちょっと遠くから見てみるの。

教師：なるほど！箱を積む役の人には見えないもんね。気付かないまま積んでいくと全部倒れちゃうもんね。大事な役だね。

E児：Fちゃんよろしくね！私はどんどん箱をつなげていくね。積む順番に並べておくと早く積めるかもしれない。

教師：いい考え！自分たちで積む順番が分かるようにしておくのもいいね。みんなで確認しておこうよ。

D児：みんな見て！ここの箱から積んでいこうね。

その後、繰り返し『箱んでハイタワー』に取り組み、勝った喜びや負けた悔しさを友達と共有し、諦めずに取り組もうとする。



### ③ 環境の構成

- ・1回戦ごとの積んだ箱の高さをすずらんテープで測り、保育室に記録しておくことで視覚的に積んだ高さが分かるようにし、次の活動に期待をもてるようにした。
- ・様々な作戦のアイデアを引き出すような素材(いろいろな形の空き箱、クラフトテープなど)を十分に用意しておくことで、共通の目的が実現した喜びを十分に味わえるようにした。
- ・チームの友達と話をするときには、顔を見合わせて話せるよう円形になって話し合いをした。教師もモデルとなるように一緒に話し合いに参加し、思いが伝わった瞬間を言葉にして伝えたり、状況を整理したりした。
- ・思いを伝えるだけではなく、友達の考えをじっくりと聞き、受け止めたり、作戦に生かせるように、教師が言葉を補足したり、分かりやすい言葉に言い換えたりして思いを伝え合う雰囲気大切にした。

### ④ 意図

- ・作戦会議の時間を十分に確保することで、友達と作戦を立て、協力し合いながら活動を進めてほしい。
- ・勝った喜びや負けた悔しさなど、いろいろな気持ちを味わいながらも諦めずに取り組み、友達と力を合わせたことで目的を達成した経験を味わってほしい。
- ・話し合いの中で、いろいろな友達に自分の思いをありのままに出したり、互いの考えを受け止め合ったり、受け入れたりしながら話し合うことの大切さ、楽しさ、面白さを感じてほしい。

### ⑤ 幼児に育てている力 (「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」から省察する)

- ・チームでの話し合いのときに、自分の思いを言葉で伝えようとする。また、理由や考えも「○だから△△じゃないかな」などと話し、相手に伝わるように言葉を選んで伝えようとしている。言葉による伝え合い 思考力の芽生え
- ・同じチームの仲間と役割分担をしながら、チームのみんなですべて勝とうと作戦を立て、取り組んでいる。協同性
- ・友達や学級の人々と考えを出し合ったり、協力したりしながら同じ目的に向かって取り組む中で、気付いたことや考えたことを友達に伝える姿から、自分の力を発揮する喜びを感じている。協同性
- ・様々な素材を使って箱を積み上げていくことで、箱や教材の性質に気づき、積み方を考えたり、箱の幅や長さを考えてつなげたりする。数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと (Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り)

この事例では、意欲、試行錯誤、思いの伝え合いの三つの視点から考えてみます。

まず一つ目は「意欲」という点です。

この事例では、好きな遊びの中でいつも使っている空き箱を使って、箱を高く積む遊びをすることで親しんでいる素材を使ったゲームにつながり、「もっと高く積んでみたい」「やってみよう」という意欲をもち始めていることを読み取っています。遊びの中では、一人ひとりが自分なりに試したり、考えたりしながら箱を高く積むことを楽しんでいましたが、チームになり、

競うことで「相手のチームに勝ちたい」「もっと高く積むためにみんなで作戦会議をしよう」と仲間と思いを伝え合いながら、みんなで同じ目的、目標に向かい、意欲をもって活動に取り組む姿につながりました。一人ひとりの意欲が目的や目標を達成するための大きな力となり、勝てたときのうれしさ、負けたときの悔しさが倍増するきっかけとなりました。このような気持ちを経験する機会を丁寧に保障し、教師もその思いに共感することで意欲をさらにもち、繰り返し取り組む姿につながると考えます。

二つ目は「試行錯誤」という点です。

幼児は高く積むための箱を作れるように考え、友達と思いを出し合いながらどのようにつけていくかを試したり、工夫したりしながら活動に取り組んでいました。素材の使い方やルールへの提示は幼児の考えだけでは限られてしまいます。そこで、教師も遊びの一員として加わり、中型積み木までの高さの箱はつなげてよいことを提示したり、つなげるテープの素材をどれにするかを選択できるように提示したりすることで、新しい箱のつなげ方に気付いたり、「いいこと思いついた!」という発見につながったりできるようなきっかけを与えています。思い通りにいかなくても試行錯誤をしたり、工夫したり、仲間と一緒に試してみたりして粘り強く取り組む時間を保障し、その経過を価値づけることが大切であると思います。

三つ目は「思いの伝え合い」という点です。

『箱んでハイタワー』に取り組む中で、チームになって活動をすることで、必ず友達とのやりとりが生まれます。その中で自分の思いを伝えたり、友達の思いを受け止めたりしている姿が見られ、思いを伝え合うことの大切さや必要感に気付いて取り組む姿につながりました。そのような姿を教師は丁寧に捉え、必要に応じて言葉を補足したり、思いが伝わったときの場面を見逃さず、状況を言葉にして伝えたりすることで思いを伝え合う姿を支えています。

次に、この実践からⅠ期を振り返ってみると、Ⅰ期から様々な遊びや活動をする中で、友達に思いを伝えようとしたり、自分なりに試してみたりする姿が重要だと思えます。また、2～3人のグループ活動を取り入れ、少人数の中で自分の思いを伝える経験をしたり、『おはなしタイム』として他愛もない話をしたりすることで、自分の思いを構えずに伝えられる雰囲気作りにつながり、いざチームで作戦会議をするときには受け入れてもらえるという自信をもった状態で自分の思いを伝えることにつながりました。そのような経験が土台となって、Ⅱ期の子どもたちの姿につながるのではないかと思います。

幼児期にいろいろなことを体験し、試行錯誤したことをとおして、成功した経験を積み重ねたことによる自信がⅢ期の意欲的な姿や小学校入学に向けて期待をもつ姿につながると考えます。





## 事例11 II期（5歳児11月～12月）

それいいね

—劇ごっこのお話づくりをとおして—

事例を読み取る  
キーワード

・協同性  
・言葉による  
伝え合い

### <事例で伝えたいこと>

この事例では、劇ごっこのテーマを決める話し合いの中で、自分の思いを言葉で伝えたり、友達の意見を聞いて自分の思いを考え直したり、クラスみんなで劇ごっこを成功させたいという友達同士で協同する姿について考えます。

#### ① 事例の概要

園では、春頃から、グループや役割ごとに話をする機会を設けてきた。少人数であれば自分の思いを言える幼児が多く、その経験を経て、友達とは違うことを思っていることに気づき、友達の話聞くということにも意識をもつようになってきた。

#### ② 具体的な活動の様子

劇ごっこのお話を考えるに当たって、みんながそのお話を理解しやすいように、幼児たちの好きな絵本の内容を元に、オリジナルのお話を考えていくことにした。この日は、それぞれの好きな絵本出してもらい、幼児たちの意見の中から、「ももたろう」「スイミー」「一寸法師」の3種類に絞った。しかし、どの話にするか決まらず、「絶対、『スイミー』がいい」「最初に『ももたろう』って言ったから『ももたろう』にする」などそれぞれが主張していた。そこで、保育士はそれぞれのお話の中で一番好きな場面を一つ出してもらい、それを発表してもらうことにした。そうすることにより、「自分では気付かなかったいい場面があるかもしれない」と伝えると、「そうだね」と幼児たちも納得し、三つのグループに分かれ、話し合いを始めた。

ももたろうグループでは、「鬼とたたかうところがいいんじゃない?」「それいいね」と一人の意見に同意する姿が見られたが、スイミーグループでは、「赤い魚がみんなで力を合わせてマグロを追い払うところがいい」という幼児に対して、「エビが出てくるところがいい」と言う幼児がいる。「エビはカッコいいかもしれないけど、エビは一匹だけど赤い魚はみんなでマグロを追い払うんだよ」との言葉を受けると、「そっちの方がいいかもしれない」と言い、スイミーグループの意見としてまとまる。

その後、話し合いの内容を1グループずつ発表してもらった。

ももたろうグループは「仲間を集めて鬼とたたかうところ」、スイミーグループは、「みんなで力を合わせてマグロを追い払うところ」、一寸法師グループは、「困っている人を助けるところ」というような意見にまとまった。保育士は、ホワイトボードに書いていき、「今、三つの意見が出たけれど、一寸法師グループの「困っている人を助ける」というのは、どこの場面のこと?」と尋ねると、「お姫様が鬼に連れていかれそうになって困っているから、一寸法師が鬼をやっつけて助けるところ」という返答が来た。「わかりました。今、出してもらった意見はどこか似ているところがあるように思うんだけど、どこかわかる?」と問うと、幼児たちはそれぞれ

れ考えているが、ピンときていない様子だったので、更に保育士が「マグロを追い払う、というのはどういうことだろう？」と言うと、「あっちいけっていうこと」「やっつけること」「あ、悪者をやっつけるところかな?」「鬼とかマグロは悪いもんね」と、幼児たちから発言がある。保育士が、「そうだね。違うお話の好きな場面を出してもらったけど、“悪者をやっつける”というところはみんなが好きな場面だったから、その場面を入れてお話をつくっていくのはどうかな」と話し、お話づくりに取り掛かる。

### ③ 環境の構成

- ・話し合いをするときには、全員の表情が見えるように椅子を円形に並べて行うようにした。
- ・幼児たちが発言した内容をホワイトボードに書き、情報を共有できるようにした。

### ④ 意図

- ・幼児たちが思っていることを言葉で伝えられるようにしたい。
- ・大人数では自分の思いを伝えにくい幼児も少人数で話す時間を設けることで友達に思いを伝えられるようにしたい。

### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・自分の思いや考えを言葉で伝え合う力 言葉による伝え合い
- ・友達の意見にも耳を傾けて、みんなで劇を作り上げていこうとする協同の力 協同性

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

このクラスでは、Ⅰ期となる春頃から、少人数のグループに分かれて話し合いの機会を設けてきました。具体的には、遠足でグループごとにどの順序で水族館を見て回るかという話し合い、夏祭りでは同じ役割のグループでどのような仕事内容にするかなどを話し合う機会を積み重ねてきました。最初は自分の意見を言って押し通そうとする姿が多く見られていたので、保育士が間に入って幼児たちの意見を聞き、受け止め、補足したり言い換えたり、話の要旨を確認したりして、どの幼児も理解できるように話の内容をまとめるなどして、どの幼児も発言できるようにグループみんなの意見を引き出す援助をしてきました。

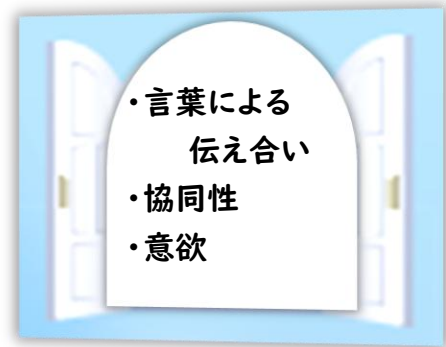
こうした一人ひとりの意見を大事にする援助を大切に、クラスのみんなで劇ごっこに取り組んできました。一人ひとりが劇を成功させたいという共通の目的に向けて気持ちを一つにして、一人だけの力では成し遂げられないことに、クラス全員で力を合わせて取り組んだ、充実感や達成感を味わった経験が、小学校以降の学習につながっていくと考えます。

どのような意見も発言してよいという経験をとおして、幼児たちは、自分と同じ意見もあれば、そうではない意見をもっている幼児もいることに気づき、自分以外の他の友達の意見に耳を傾けるようになってきており、友達の意見を聞いた上で、自分の意見を考え直す経験もしているのではないかと考えます。

自由になんでも言えるクラスの温かい雰囲気は、小学校以降の生活においてもとても重要です。自分は、受け入れられているという信頼感や安心感の蓄積が、小学校においても授業や様々な活動の中で自信をもって自己を発揮し、友達と協同するようになると考えられます。



**事例12** II期（5歳児1月）  
アイドルになりたい！  
—アイドルショーをとおして—



<事例で伝えたいこと>

この事例では、修了に向けて自分たちで遊びを進めることが主となってきた時期の中で、どうすれば幼児同士でイメージしていることを共有し、実現しようとするか、素材や道具を試したり、工夫したりしながら遊びに必要なものをどのように作り進めていくかを考えていく過程を考えます。

① 事例の概要

進級当初からごっこ遊びをする幼児の姿が多く見られ、特にアイドルごっこやプリンセスごっこなどをすることが多かった。1月になり、繰り返し楽しんでいたアイドルごっこを再びやりたい！という話になり、必要なものを考えたり、一緒に遊ぶ友達とどのように進めていくかを相談したりしながら遊ぶようになった。

② 具体的な活動の様子

<1日目>

遊びの中で、「アイドルになりたい！」と話したA児をきっかけに、4～5人の幼児が集まった。教師が「どんなアイドルになるの？」と聞くと、「スカート履いてるよ」「キラキラしているんだよね」と話し、自分たちでカラーポリ袋を用意してスカートになるように切ったり、花紙や折り紙などを使って髪飾りを作ったりしていた。教師も幼児だけでは難しい部分（スカートのウエスト部分にゴム紐を通すなど）のみ手伝い、幼児たちのイメージを自分たちで形にできるように見守っていた。B児は「踊るためのステージも作らないとね」と話し、みんなで巧技台を持ってきて並べたり、ステージを見るためのお客さん用の椅子を用意したりしていた。A児が「先生、アイドルが踊る曲をかけてほしい！」と話したため、教師がタブレットで検索して曲をかけると、曲に合わせて踊ることを楽しんでいた。この日は周りにいた年長児がお客さんとしてステージを見ていたが、A児は「明日は年少さん、年中さんも呼びたいね！」と一緒に遊ぶ幼児に話しかけていた。教師も「年少さんと年中さんの先生に聞いてみようか」と声を掛けると、嬉しそうにする姿が見られ、「じゃあ衣装はここに取っておこう」「チケットとかも作らないと！」と話し、明日の遊びに必要なものを考え、見通しを立てていた。

<2日目>

前日の遊びを思い出し、早速アイドルごっこが始まった。音楽ライブのようなイメージをもっているB児が背景も作りたいと話し、ステージの飾り付けをすることになった。B児は「光が当たるんだよね」と話し、スポットライトに見立てたものを作ろうとしていた。教師は自分たちで素材を選んで見立てられるように、スズランテープ、ラピーテープ、セロファン、カラーポリ袋などを用意しておいた。すると、その様子を見て一緒に遊んでいた幼児が素材を見渡しなが

「これ（ラピーテープ）はどう？」と話しかけると、B児は「いいね！キラキラしている！」と話し、背景に見立てた板段ボールに飾り付けすることを楽しんでいました。ステージの背景が完成すると、巧技台を用意して段差をつけ、ステージの台に見立てて踊ったり、歌ったりすることを楽しんでいました。教師が「年少さんと年中さん来てくれるみたいだよ。誘ってみたら？」と声を掛けると、A児「本当！やった！あ、でもチケットまだ作ってない！」B児「急いで作ろう！私紙切るから、ペンでアイドルショーって書いて！」A児「分かった！」と話しながら、年少児の招待に向けてチケットを作り進めていた。3～4人の他の幼児も「ここにチケット入れようよ」「じゃあ私配るね」「サイン描いてあげようよ」など、アイデアを発信し、それぞれの意見を出し合いながら遊びを進めていった。その後、年少児と年中児にお客さんとしてアイドルショーを見てもらい、自分たちはアイドルになりきって踊ったり、「タッチしよう！」「サインあげるね」と話したりしながら、イメージの世界を楽しみ、満足感を味わう姿が見られた。

### <3日目>

B児は、新しい道具としてヘッドマイクを作っていた。その姿を教師が「頭につけるマイクだね！いいね！」と受け止め、作っているものを共有できるようにすると、A児や周りの幼児が「どうやって作ったの？」「私も作りたいから教えて！」と話し、アイドルごっこをしている幼児みんなと同じものを作っていた。「カチューシャもあつたらいいよね」と話した幼児をきっかけに、カチューシャも作り、自分たちが身に着けるものを増やしていく姿が見られた。アイドルショーで流す曲も固定されてきていたため、教師はタブレットの中に曲のセトリリストを作っておき、幼児が操作できるようにしておいた。すると、「1番はこれで、次はこれかな！」「じゃあ順番が分かるように書いて貼っておこうよ」と話し、自分たちでプログラムを考えて曲を流したり、お客さんに向けて「次の曲は〇〇です！どうぞ！」と話す司会役も決め、進行をしていた。踊っているうちに、「私も真ん中で踊りたい」と話す幼児の姿が見られるようになり、「じゃあ1番は〇〇ちゃん、次は私ね」「曲ごとに交代しようよ」と話し、踊る順番、立ち位置なども相談しながら本物のアイドルのように踊ることを楽しんでいました。遊戯室でアイドルごっこをすることが多かったが、園庭でも遊ぶことを楽しみ、継続しながら遊びは一週間ほど続いた。

### ③ 環境の構成

- ・幼児同士のイメージやアイデアの伝え合いができるように、いろいろな素材や道具を使いやすく配置しておき、自分たちで選んだり、試行錯誤したりできるようにした。
- ・幼児主体で遊びを進められるように、タブレットを活用し、自分たちで曲をかける操作もできるようにした。
- ・共通の目的がより明確になるように、ステージの背景やヘッドマイクなど、遊びを形づくるために必要なものを幼児同士で力を合わせて作り進められるようにした。

### ④ 意図

- ・自分たちで遊びを進めていく面白さ、友達と相談をしていろいろな意見やアイデアを取り入れることでさらに遊びが広がっていく面白さを味わってほしい。
- ・イメージしたものを友達と共有したり、伝え合ったりして形になっていく楽しさを味わってほしい。

- ・次の日に遊びが繋がっていくように、自分たちで遊びを考えたり、見通しをもって活動を組み立てたりして欲しい。

⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・同じ目的に向かって取り組む姿から、友達の存在の大切さや目的に向かって力を合わせる喜び、面白さを感じている。 協同性

- ・イメージしたことを言葉にして伝え合ったり、相手の思いを聞き入れたりする。

言葉による伝え合い・協同性

- ・自分の意見を提案したことが受け止められる姿や、一緒に素材を選び、同じものを工夫して作る姿から、自分の思いをありのままに出せる雰囲気や友達関係がつくられている。

言葉による伝え合い・協同性

⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

まずⅠ期の振り返りとして、幼児たちは4月の年度当初からごっこ遊びを楽しみ、ごっこ遊びの中で友達とやりとりをして遊びを進めていこうとしたり、自分の思いを伝えようとしたりする姿が見られていました。しかし、自分の思いが優先されることが多く、友達の思いを聞く、受け入れることはまだ難しく、教師がそのたびに状況を整理したり、相手の思いを聞いたことで遊びが広がっていった面白さを感じられるような環境を工夫したりしてきました。繰り返し援助をしていったこと、そして幼児たちが自分で相手の思いを聞き入れたり、受け止めたりする大切さを感じ始めたからこそ、今回の事例のような遊びに広がっていったのではないかと考えられます。

Ⅱ期となる本事例では、自分たちで遊びを進めていく面白さや友達とやりとりをしていく中で遊びが展開していく楽しさを感じられるよう、教師はあえて声を掛け過ぎず、見守る援助を心掛けました。

接続のとびらのキーワードにもある「子どもが考える時間の確保」をしたことで、自分たちで考え、自分たちで遊びに必要なものを作り、自分たちで遊びを進めていく姿につながったと感じます。そして、自分たちで考えて遊びを展開していくことで、「明日はこんなことをしてみよう」「次はこれを作ろう」「〇〇があつたらいいかな？」と、友達にイメージやアイデアを共有しながら、主体的に遊ぶ姿につながったのではないかと思います。そして、教師や友達にその姿を認め、受け止められる経験を積み重ねたことで安心して自分の思いを友達に伝えたり、受け止めたりするようになり、次第に思いの伝え方を工夫したり、自分の気持ちに折り合いをつけたりすることにつながっていくと感じます。

この事例からⅢ期に向けての見通しを考えていくと、自分の思いを伝える主体性や自己発揮をする姿につながっていくと考えられます。また、同じ目的に向かって遊びを進めていたことから、みんなで作り上げていく協同性の育ちにもつながり、みんなで活動をする楽しさ、面白さを感じてほしいです。

加えて、Ⅱ期では、アイドルというイメージでごっこ遊びを楽しんでいましたが、様々な表現を楽しむことにつながっていくと感じたため、一人ひとりの表現を認めることが、「その子らしさ」を感じられる姿につながっていき、遊びや生活の中でも自然と表現したくなる幼児が育っていくのではないかと考えます。

**事例13** II期（5歳児1月）  
どうやってかくの？  
一年賀状づくりをとおしてー

事例を読み取る  
キーワード

・言葉による  
伝え合い  
・ことばのとびら

<事例で伝えたいこと>

この事例では、幼児の「身近な人に年賀状を渡したいと思い」から「文字を書いてみたい」という気持ちが芽生えたことに端を発し、相手のことを思いながら、年賀状をつくり、自分の気持ちを相手に伝えることや伝わった喜びを感じる様子について考えます。幼児たちの「やりたい」という気持ちをどのように実現していくのかについて考えます。

① 事例の概要

年明け、年始の挨拶に始まり、家庭での正月の出来事を幼児たちが楽しそうに話す姿が見られていた。保育士が、正月の文化や習慣について話をすると、年賀状の話題が出てきたため、年賀状コーナーを設定した。年賀状をつくる遊びをする中で、「文字を書きたい」「友達に気持ちを伝えたい」という思いが芽生えてきた。

② 具体的な活動の様子

新年が明け、登園してきた幼児たちから、「あけましておめでとうございます」と新年の挨拶が聞かれた。休み中（正月）の話を尋ねると、「おばあちゃんの家に行った」「お餅を食べた」「年賀状をもらった」等の話題が出てきた。その後、保育室の一角に「年賀状コーナー」を設け、年賀はがきに見立てた用紙やポスト等を設定したところ、数名の幼児がそれに気づき、用紙を手に取り、年賀状づくりを始めた。

A児は、干支のイラストに色塗りをしたり、予め印刷された「あけましておめでとう」の文字を色鉛筆でなぞったりしている。「きれいな色で塗れたね。（なぞられた文字を指さして）『あけましておめでとう』って書いたんだね。」と声を掛けると、「これ、ママにあげるんだ！」と嬉しそうに話している。

B児は、イラストのみ印刷された用紙を選び、色塗りをした後、自分で文字を書こうとしている。途中まで文字を書くが、思ったように書けず、ペンで塗りつぶしている姿が見られる。すると、「先生、〇ってどうやって書くんだっけ？」と保育士に尋ねる姿が見られる。ひらがな表の文字を指さし、「この字だね」と、知らせると、保育室に掲示していた五十音表をよく見ながら、書きたい文字を探して真似して書こうとしている。年賀状ができあがると、満足そうな表情を見せている。

C児は、「〇〇ちゃんに書くんだ」と渡す相手を決め、書き始めている。異年齢で活動していたこともあり、年下の友達に年賀状を書こうと張り切っている。「〇〇ちゃんに、『またあそぼうね』ってピンクで書いた。お花もかいたんだ」等と相手のことを考えながら、書いたことを保育士に見せている。

年賀状が出来上がると、「〇〇ちゃんに渡してくる」と他のクラスに行き、「あげる！」と元氣よく渡していた。相手の友達が恥ずかしそうに「ありがとう」と言ってくれれば、嬉しそうな表情を見せていた。

### ③ 環境の構成

- ・本物の年賀はがきをコーナーに貼って置き、年賀状のイメージが湧くようにする。
- ・年賀はがきに見立てた用紙を準備していく。文字にあまり興味がない幼児もやってみたくて思えるよう、干支を印刷した紙、色鉛筆、マーカー等も準備する。
- ・年賀状や手紙のイメージがもてるよう、ポストを用意する。
- ・五十音表を掲示しておき、書きたい文字を自分で探して真似て書けるようにしておく。
- ・ひらがなの文字スタンプを用意し、文字を書くことが難しい幼児もスタンプを押す遊びから、文字への興味のきっかけとなるようにする。
- ・「あけましておめでとう」等の言葉を書いたはがきも用意し、文字をなぞって遊べるようにしていく。

### ④ 意図

- ・季節（正月）を感じ、文化や習慣に興味をもてるようにする。
- ・新年の挨拶（「あけましておめでとうございます」）を知り、友達や保育士に挨拶をする。
- ・文字や触れ、真似して書いたり、読んだりすることに興味をもてるようにする。
- ・友達や保育士等、身近な人とのやりとりを楽しんだり、自分の気持ちを伝えることや伝わった喜びを感じられるようにする。

### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・身近な人に親しみをもち、自分の気持ちを伝えようとする力。
- ・年賀状を渡した相手からの感謝の気持ちや、気持ちが伝わった喜びを感じる姿。

社会生活との関わり 言葉による伝え合い

- ・季節の文化や習慣、干支等に興味を持ち、年賀状をつくってみようとする意欲。

豊かな感性と表現

- ・文字に興味をもち、友達や保育士と読んだり、書いたりしようとする姿や意欲。

協同性 数量や図形、標識、文字などへの関心・感覚

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

はじめに、『ことばのとびら・文字への興味』について考えていきます。

文字への興味や理解は普段の生活や遊びの中での経験をとおして育まれるものであることから、文字に触れられる環境づくりはとても重要だと考えます。

Ⅰ期では、「文字との出会い・興味」を大切にするために、保育士が絵本の読み聞かせをしたり、自分で本を手にとって楽しめるよう、絵と文字が楽しめる絵本や図鑑等を絵本コーナーに設定したりしました。また、生活で使うスペースでは、個人ロッカー等、個人の持ち物には名前をひらがなで記し、自分の名前から徐々に文字に触れていけるようにしました。また、生活の流れ等を伝えるときには、幼児にわかりやすいようにイラストに文字を添え、少しずつ自分

の名前以外の文字にも触れられるようにしていきました。

Ⅱ期では、文字を使って遊ぶことができるような玩具（カルタ等）や、ごっこ遊びの中で、必要なもの、例えば、チケットつくりやお店屋さんの看板づくりなどのことができるような画用紙やサインペン、色鉛筆等の用具や素材を準備していきました。友達や保育士と遊ぶ中で、自然と文字に触れ、自ら必要性を感じながら、文字を取り入れて遊ぶ経験を十分に楽しんでいけるような援助をしていきました。

このような積み重ねが、文字への興味や関心、理解へとつながり、文字が単に音や形だけの認識ではなく、意味をもつ言葉を構成するものであることに気付きました。文字への興味が高まったこの時期に『年賀状ごっこ』ができる環境を用意したことで、幼児が楽しみながら、文字に触れることができたのではないかと感じます。

次に、『言葉による伝えあい』について考えていきます。

上記のような遊び（チケット作り、お店屋さんの看板作り等）を友達とする中で、文字が、事柄や気持ちを伝える手段の一つであることを知りました。そして、身近な人に「自分の気持ちを言葉や文字で伝えたい」という気持ちも芽生え、年賀状作りを楽しむ姿が見られました。

上記のような気持ちが芽生えたことで、今まであまり文字を書くことに興味がなかった幼児が、「〇ってどうやって書くの？」と自ら、文字の書き方を尋ねて書いてみようとしたり、幼児たちが身近な人のことを思い、どんな年賀状を作りたいか、何を伝えたいか？等を考えたりする場面も見られました。また、年賀状のやりとりをする中で、相手に気持ちが伝わった喜びも感じることができ、人とやりとりをすることの楽しさや、身近な人への信頼感や親しみがさらに湧いたのではないかと感じます。

この時期の幼児たちは、「正しい文字を書く、覚える」ことを到達点にするのではなく、「文字への興味」や「自分の気持ちを伝えることの楽しさや意欲」等を大切に、生活や遊びの中で、自然と興味湧くような援助が必要だと感じました。

また、「文字を教える」「文字を覚えさせる」のではなく、幼児たちの「やってみたい」を「引き出す」ことが幼児たちの主体的な学びへとつながるため、Ⅲ期ではⅡ期での楽しい経験を基に、色々な文字を読んだり、書いたりすることの楽しさや大切さを感じながら、学習への意欲を高めていけるとよいと思いました。

## 事例14 Ⅱ期（5歳児1月）

また頑張ればいいよ

—気持ちを切り替えて遊びを進めていく—

事例を読み取る  
キーワード

・協同性  
・気持ちの調整  
・意欲

### <事例で伝えたいこと>

この事例では、ルールや勝敗のある遊びをとおして、共通のルールや遊びの目的を理解して遊ぶ中で、自分の気持ちを切り替える姿や友達と互いに思いを受け止めたり受け入れたりしながら一緒に遊びを進めていく姿について考えてみます。

#### ① 事例の概要

学級全体の活動で宝取り鬼をする中で、遊びのルールは理解しているが、捕まった悔しさや思うようにならない状況から、気持ちの切り替えができない姿が見られる。教師や友達の声掛けにより気持ちを切り替えたり、同じチームの友達と作戦を立てたりして自分たちで遊びを進めていく姿につながっていった。

#### ② 具体的な活動の様子

好きな遊びの中で、自分たちで誘い合い助け鬼をしていたが、遊びが停滞してきたため、教師は学級全体の活動で「宝取り鬼」を取り入れた。動きが分かりやすくなるよう、自分のチームの陣地に入ってきた相手チームの友達をタッチして捕まえることと、相手チームの陣地にある宝を取れば勝ちというルールにした。

チームを決めた後、「どちらのチームも準備はいいかな。」と教師が尋ねると、A児が「作戦会議しよう！」と言ったため、各チームで作戦会議を始めた。黄色チームでは、A児が「私に取りに行く。」と言い、B児が「僕も宝取りたい。じゃあ、みんなで行く？」と言うと、他児が「いいね。」と同意して作戦が決まった。1回戦では、B児が相手陣地に宝を取りに行ったが、途中で相手にタッチされてしまった。作戦どおりにいかずB児が「もうやりたくない。」と悔しがって泣いた。「惜しい、あと少しだったね。」と教師が声を掛けると、C児も「惜しかったよね。Bさん、走るの早かったよ。」とB児に声を掛けた。助け鬼のルールは取り入れなかったため、捕まってしまったB児は相手陣地の中でしばらく黙って座っていたが、少しずつ気持ちを切り替えて友達を応援し始めた。

1回戦終了後、教師が幼児たちを集めて1回戦を振り返った。「捕まって悔しい時もあったけれど、チームへの応援がどちらのチームもとてもよく聞こえたよ。みんなはどうだった。」と尋ねると、C児が「聞こえた！捕まったときは応援したよ。」と答えた。B児は何も言わなかったが、嬉しそうな表情を浮かべていた。

2回戦も、各チームの作戦会議をしてから始めた。「僕は宝を取りに行く。」とB児が言うと、C児は「いいよ、そうしよう。」と言い、「Dちゃんが反対から行ったら？」とD児にB児とともに宝を取りに行くことを提案した。D児は「オッケー。」と言い、B児と目を合わせた。しかしD児は、開始早々に捕まったことで参加意欲がなくなり、自分のチームの陣地から出てこな



くなった。相手チームの幼児が「捕まったらこっちに来るんだよ、Dちゃん、捕まったよ。」と責めるように言い、ゲームが中断した。教師は「悔しかったよね。宝取れそうだったんだよね。」と声を掛けると、「また頑張ればいいよ。」とB児が言った。しばらくすると、E児が「みんな出てきてー。」と大きな声でチームの友達に声を掛けた。その声に「みんなで行くよー。」とF児が返答したことで、チームみんなで宝を取るために再度動き出した。

2回戦終了後、再び教師は幼児たちを集めて振り返った。「黄色チームがみんなで声を掛け合っていたね。どんな作戦だったか教えてもらっていい？」と聞くと、C児が「宝を守る人と宝を取りに行く人を決めたんだよ。BさんとDちゃんは速いから、宝を取りに行ったら私は守ることにした。」と言った。教師は、「そうか、Bくんは走るのが速いから宝を取りに行く役になっていたんだね。1回戦は少し悔しかったけれど、2回戦はDちゃんと一緒に宝まで走っていたね。」と言うと、B児は、「2回目は頑張ったよ。」と答えた。「Eちゃんが、みんな出てきてー！って言ったのはどうして？」と尋ねると、「Dちゃん捕まっちゃったけど、もう一回やろうと思った。」と言った。教師は「悔しかったけれど、みんなで考えた作戦でやるぞ！っていう気持ちがかかっていい合図だと思ったよ。」と伝えた。幼児たちからは、「またやりたい！」という声が上がった。昼食後、B児が「宝取りやる人。」と声を挙げ、数人で宝取り鬼が始まった。

### ③ 環境の構成

- ・ルールを共通にし、自分の力を発揮したり友達と力を合わせたりできるように、学級活動で「宝を取る」という目的が分かりやすい新しい鬼遊びを取り入れた。
- ・ゲームが終わるごとにみんなで集まって活動を振り返る時間を設けた。

### ④ 意図

- ・遊びの中で自分の力を発揮するとともに、友達の動きに気付き、力を合わせて取り組む楽しさを味わってほしい。
- ・うまくいなくても、友達との関係の中で気持ちを切り替えたり、友達と一緒に考えたりして繰り返し挑戦してほしい。

### ⑤ 幼児に育てている力（「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」から省察する）

- ・友達と一緒に体を十分に動かして遊ぶ。 健康な心と体
- ・自分から宝取り鬼に進んで参加し、諦めずに取り組もうとする。 自立心
- ・宝を取りに行くという共通の目的に向けて、友達の思いや得意なことなどが分かり、力を合わせて取り組もうとする。 協同性
- ・自分たちの動きや相手チームの動きを予想して、宝を取りに行くための方法を考え、分担して取り組む。 思考力の芽生え
- ・ルールを理解して取り組み、悔しくても気持ちを調整して遊ぶ。 道徳性・規範意識の芽生え
- ・友達の気持ちに寄り添い共感したり友達の行動を認めたりする。 道徳性・規範意識の芽生え

### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例では、幼児が普段の遊びの中でしている助け鬼が停滞してきたため、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わってほしいと思う教師が「宝取り鬼」を提案しました。様々な思い

を体験しながら幼児が自分たちで遊びを進めていけるように、教師は一人ひとりの幼児の実態や幼児同士の関係を見守っています。

この事例のB児は、新しい活動に興味・関心をもち、この遊びの目的である「宝を取る」ということに積極的に向かっていく幼児です。これまでの様々なルールのある遊びの楽しさを経験し、自分の動きにも自信をつけてきました。その他の幼児も、自分は走るのが速い、遠くまでボールが飛ぶなど、自分に自信をもって遊んだり、〇〇くんは避けるのがうまい、△△さんは面白いことを考えるなど友達の知らなかった一面に気付いたりしてきました。B児は、自分は捕まらずに宝を取れると思っていたのにうまくいかなかったことで遊びが中断しそうになりましたが、教師や友達にその悔しさを受け止めてもらうことで、気持ちを切り替えることができました。捕まっても応援していた姿を認めてもらったり、再び挑戦することで宝取り鬼の楽しさを味わったりしたことで、2回戦では落ち込むD児に向けて「また頑張ればいいよ。」と声を掛ける姿につながりました。

また、2回戦ではE児が、遊びが中断したところで「みんな出てきてー。」と声を出したことが、遊びの再開のきっかけになりました。教師は、幼児の実態から、宝を取れないことや捕まることにより、悔しがって泣いたり遊びを抜いたりすることを予想し、普段から一人ひとりの思いに寄り添い、受け止めるようにしてきました。この場面でも教師は、D児の悔しい思いに寄り添ったり、D児を責める相手の言い方等を振り返ったりするつもりでしたが、E児とF児のやり取りにより遊びが続くことになりました。ゲームの後にその場面を振り返り、幼児一人ひとりがどんな思いだったのかを共有したり、それぞれの考えを認め価値付けたりすることで、「またやりたい。」という気持ちにつながることができました。

ここで、事例につながるⅠ期を振り返ります。様々なルールのある遊びを取り入れ、ルールを守ると楽しいと思える機会を積み重ねる中で、幼児は、楽しい、うれしいという感情だけでなく、悔しい、悲しいという感情もたくさん経験します。教師は、幼児が自分の思いを出すことや相手の思いを知ることができるように、幼児一人ひとりの感情に寄り添ったり、うまくいなくてももう一回やってみようと思えるように一緒に遊びながら方法を提案したりして、幼児が達成感や満足感を味わい、やってみたら楽しかったという思いを積み重ねられるように援助を繰り返します。初めは教師が一人ひとりの思いを受け止め寄り添い、幼児が友達の良いところを認める姿や力を合わせる姿などを認めていくことで、幼児同士の関わりの中で気持ちを切り替えたり、より遊びが楽しくなるように考えたりするようになっていきます。

Ⅱ期の経験がⅢ期にどのようにつながっていくかを考えます。友達と一緒に取り組む中で、自分の思うようにいかないことで悔しがったり悲しんだりする経験をとおして、友達が自分の気持ちを分かってくれる安心感やうれしさ、再挑戦に向けて一緒に考えたり力を出し合ったりする楽しさを感じられるようにしていくことが大切です。Ⅱ期の遊びの中で、自他の得意・不得意に気付くことにより、「できる・できない」の判断をするのではなく、幼児が互いのよさに気付き認め合い、よさを生かすと自分たちの遊びがさらに楽しくなると分かることが大切であると考えます。互いのよさを生かしたらうまくいった、楽しかったという満足感や達成感は、Ⅲ期以降の学びにおいて、得意なことで自分の力を発揮する姿や、一人では難しい課題でも友達の思いや考えに耳を傾け一緒に考え解決していくことができるという気持ちや姿勢につながっていくと考えます。自他を認め合い、自信と安心感をもって生活することは、課題に向かう意欲や様々な学び方を選択する力にもつながっていくと考えます。

事例15 II期（5歳児1月下旬～2月上旬）

氷をつくりたい！

—幼児の気付きから試行錯誤する—

事例を読み取る  
キーワード

意欲

・思考力

・自然との関わり

・言葉による

伝え合い

・かがくのとりら

<事例で伝えたいこと>

この事例では、やってみたいと思ったことについて実現しようとする中で、気付いたことを友達や教師に伝えて試したり、試したことから考えて学んだりしている幼児の姿について考えていきます。

① 事例の概要

池の氷を取ることを毎日楽しんでいたところ、バケツに氷が張っていることに気付く。そこから、「氷をつくってみよう」と考えたり、試したりして友達と一緒に目的を実現しようと試行錯誤する。

② 具体的な活動の様子

1月の下旬頃、池の水が凍り、それを取ったり触ったりして遊ぶことを毎日楽しんでいた。池の氷を取るために、園庭の砂場遊具を持ってきて、それを使って氷を取る姿があった。ある日、しまい忘れていたバケツの中にたまっていた水が凍っていることを発見する。

A児：見て！バケツに氷ができていますよ！

B児：本当だ！すごいね。取ってみよう！

二人はバケツにできた氷を取る。

A児：取れた！丸いね！

B児：バケツの底が丸いからかな。

教師：氷ってできるんだね（とつぶやく）。

A児：家でも氷つくれるもんね！

B児：もしかして魚の型(砂場の型抜き)でつくと魚の形ってことかな？

A児：そうじゃない？いろんな型を持ってこよう！

二人は型をたくさん持ってきて、その型に水をいっぱい入れた。

教師：どこに置いておくの？

A児：涼しいところがいいよね。

B児：池のそばかな。

C児：太陽が当たらないところがいいんじゃない？

考えて、池のそばの木の下に置くことにした。「看板をつくっておく」と言って、紙とペンで「こおりのじっけんちゅう」と書き、置いておいた。

しかし、翌日は凍っていなかった。教師は入れる水の量や置いておく場所に気付けるように見守ることにした。

A児：凍らなかったね。どうしてだろう。

B児：風があるとダメなんじゃない？

C児：そうかも！風が来ないような場所に置いた方がいいかもね！

B児：隅っこに置こう！あと囲うものもいるよね。

教師：段ボールならあるよ。

A児：使う！（と言って、池のすぐ近くの風の当たらないような隅の方に場所を移した。）

教師：そういえば、バケツでできた氷ってどのくらいの厚さだった？

B児：丸かったけど、このくらいだった(手で厚さを示す)。

教師：水はどのくらい入れるといいんだろうね。

A児：そっか！多かったのかも！

C児：少なくしてみようか。

型の中に昨日よりも減らした水を入れ、段ボールで囲い、太陽の光も遮るように覆った。

次の日、見てみると、また凍っていなかった。教師は、風が必要であることに気付けるように見守りながら、素材の違う入れ物(アルミ製のボウル)も用意して、幼児が試せるようにさりげなく置いておいた。

A児：段ボールで囲ったのに何でできないんだろう。

吹いてきた風を受けて、教師が「寒いね」と言う。

C児：風は冷たいからあった方がいいのかな。

B児：確かに池は何も被せられてないもんね。

A児：じゃあ、やっぱり池のとなりに置いてみるか！

B児：そうしよう！（と言いながら、教師の用意したアルミ製のボウルに気付く）。

B児：これ触って！冷たくない？！

C児：本当だ！冷たい入れ物の方が凍るかな。

A児：やってみよう！

池の隣の場所に、型抜きに入れた水とボウルに入れた水を用意して、置いておいた。

次の日に行くと、見事に氷になっていた。

A児：できてる！！

B児：やったね！お皿もできてるね！

C児：風って要るんだね！

### ③ 環境の構成

- ・毎朝、池を見て氷に気が付けるように、登園してすぐに園庭に出て遊べるような一日の流れを組み立てた。
- ・次の日、バケツの中の氷に気が付けるように、バケツをあえて片付けないでおいた。
- ・幼児が考えたことを実現できるように、幼児が思いついたものはすぐに使えるようにした。
- ・器の素材の違いにも気付けるようにアルミ製のボウルを用意しておいた。

#### ④ 意図

- ・池の氷に関心が向くように声を掛けたり、気付いたときに氷を取ったり触ったりして十分に関わって遊べるような一日の流れを組み立て、継続的に氷に関われるようにした。
- ・氷のつくり方を教えるのではなく、幼児が考えたことをじっくりと試せるように見守った。その中で、その日に気付いてほしいポイントは幼児が考えられるように、ヒントのような声掛けをするようにした。
- ・実験がうまくいかなくても諦めずに次の日も試せるように声を掛け、原因を考えたり方法を変えたりして取り組めるように教師も仲間として関わり、見守った。

#### ⑤ 幼児に育っている力（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から省察する）

- ・「氷をつくる」という目的に向かって、できなくても諦めずにやり遂げようと、考えたり、工夫したりしながら意欲をもって取り組んでいる。 自立心
- ・身近な素材や道具を使って、試行錯誤しながら最後まで取り組もうとしている。 自立心
- ・同じ目的をもった友達と一緒に、考えを出し合ったり、受け止めたりして協力して取り組んでいる。 協同性
- ・氷ができるためには風が必要であることや水の量、器の素材の違いなどに気付いたり、分かったことを取り入れながら継続して取り組んだりして氷づくりを楽しんでいる。 思考力の芽生え
- ・池の水が凍ることや水を意図的に凍らせることを通して、水の性質や氷の美しさ、不思議さを感じ、気付いたことや感じたことを友達や教師と共有しようとする。 自然との関わり・生命尊重
- ・氷の実験をしていることを友達や他学年の幼児に伝えたり、触らないように気を付けてほしい気持ちを表すための表現方法として文字があることが分かり看板をつくったり、必要感をもって活用したりしている。 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

#### ⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

この事例の前段階で、「氷」というものに興味をもって関わられるように、幼児の発見と感動に寄り添って保育をしてきました。氷という冬ならではの事象に対して、幼児の興味関心を捉えて、その時期にしかできない体験をするために計画的に予定を組み、幼児が「池の氷ができて」ということに気づき、感動を味わえるように関わりました。そのため、幼児は登園してすぐに池の氷を確認するようになり、池の氷を取ることを継続的に楽しむことができました。幼児の興味をもったタイミングを逃さずに関わることで、幼児がより一層意欲的に目的に向かって考えたり、試したりすると分かりました。

「氷をつくる」という目的をもって取り組む中で、水を入れる器や水の量、置き場所などを考え、方法を試し、結果から考えて方法を変えていました。教師は「その方法では氷はできないな」と思いつつも、幼児の考えた方法を実践できるように関わり、失敗することから学べるようにしました。失敗することで意欲をなくしてしまうこともありますが、教師も仲間になって一緒に取り組み、必要なことに気付けるようなヒントとなる声掛けや素材の違いにより氷ができやすくなることに気付けるような用具の準備などをしながら関わり、幼児が最後までやり遂げられるように支えました。

「氷をつくる」という目的を達成できた満足感から次への意欲へとつながると思います。また、考える、試す、振り返ることを通して得た発見や気づきが、Ⅲ期以降に経験で得たことを学びとして生かしていくことにつながるのではないのでしょうか。

事例16 II期（5歳児1月～2月）

劇をみんなで考えよう

—話し合いから実現する楽しさを感じる—

事例を読み取る  
キーワード

・言葉による  
伝え合い  
・豊かな感性  
・思考力の芽生え  
・協同性

<事例で伝えたいこと>

この事例では、生活発表会で行う劇に向けて、内容や歌の振り付けを考えることを通して、幼児が主体的に考えたり、それを友達に伝えたりして、みんなで実現していく姿について考えてみます。

① 事例の概要

劇遊びを繰り返す中で、特に気に入っていた「じごくのそうべえ」（作：たじまゆきひこ）の話を生生活発表会ですることになった。「怖いけど、おもしろい感じがいいよね」と絵本のお話と少し変えて、演じることになり、オリジナルの部分について話し合うことになった。

② 具体的な活動の様子

生活発表会に向けて、劇遊びを学級の全員で進めていた。物語に沿って、最後の場面で登場人物が目を覚まして生き返る動きをしているとき、A児が「目を開けるだけじゃつまらないよね」と言ったことをきっかけに、最後の展開を考えることにした。

教師：Aさんが最後は目を開けるだけじゃつまらないって言っていたけど、どういうこと？

A児：目を開けるだけじゃなくて、違うことがしたい。

教師：違うことがしたいっていうのは、生き返る方法を変えるってこと？

A児：そう！違う方法で生き返りたい。

教師：何かいい考えがある人はいる？

B児：そういえば、三途の川は生き返るって鬼が言っていたよね。

C児：じゃあ、三途の川に入るってことにする？

A児：いいね！おもしろそう！

教師：確かに絵本で三途の川に入ると生き返るから入るなって、手下の鬼が言っていたね。

みんなはそれでいい？（多くの幼児がうなずき、賛成する）

生き返った後は、何かに変身する？

D児：いいね～！赤ちゃんはどう？

A児：みんながバブバブ言うの、面白そう！

C児：でもちょっと恥ずかしいよ～。

B児：そうだよね。…じゃあ6歳になるっていうのは？

C児：それいいね！恥ずかしくないし、みんな6歳になるもんね！

D児：じゃあ幼稚園に戻ってくるってことは？



A児：そうしよう！

教師：三途の川に落ちて、6歳になりましたってことだね！みんなもいい？

（多くの幼児が賛成する）

劇中歌には、教師が話に合いそうな曲を提案していたが、歌詞が物語と合わない箇所があることや、うろ覚えな幼児が多いことから、自信をもって歌える幼児が少なかった。そのため、どうしたらよいか考えることにした。

教師：この歌の中で難しいなって思うところはある？

D児：言葉がいろいろあって分からなくなる。

E児：人食い鬼ってなんのことか分からない。

F児：人食い鬼って『じんどんき』のことだよな？

E児：そうか！じゃあ『じんどんき』って歌えば分かるかも！

それでごう(襲い掛かりそうな)ポーズをしたら？

教師：手遊びみたいに振り付けを考えると分かりやすいつてことだね。

F児：じゃあ『えんやこらえんやこら』（盆踊りのような動きをしながら）ってするのはどう？

D児：それ面白い！

友達が考えた動きをまねしてやってみることで、歌詞のイメージに合わせた振り付けが決まった。自分たちで決めたことで、自然と口ずさむ幼児が増えた。他学級にも「面白い歌だね！」と言われ、自信をもって誇らしげに歌えるようになった。

### ③ 環境の構成

- ・劇の題材の絵本を幼児が繰り返し手に取れるように本棚に置いておき、すぐに手にとっていつでも見られるようにした。
- ・劇として取り上げた絵本をみんなのお気に入りの絵本として特別感をもたせ飾っておいた。
- ・話し合いをするときは、友達顔を見て話せるように円形で集まるようにした。

### ④ 意図

- ・教師が決めたことをするのではなく、幼児がしたいことができる経験にしたい。また、自分の思ったことや考えたことをありのままに伝えたり、受け止め合ったりして、幼児同士で思いを伝え合い、話し合いを進めた実感をもってほしい。

### ⑤ 幼児に育てている力（「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」から省察する）

- ・「面白い劇にしたい」という共通の目的に向かって考え、思いを伝え合い、みんなでより楽しくなるように力を出し合っている。 協同性
- ・友達のを考えを受け入れてから自分の思いを言葉にして伝えている。 言葉による伝え合い
- ・歌詞からイメージを膨らませ、歌詞に合った表現方法を考えたり、それを学級みんなの前で自由に表現して見せたりしている。 豊かな感性と表現

⑥ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

5歳児5月頃から、幼児同士で生活グループの名前や運動会のダンスを話し合い、決める経験をしてきました。そのため、どうしたらよいか意見を出し合う場面で、自分の意見を言ったり、相手の思いを聞いて受け止めたりすることができるようになってきています。

本事例では、「最後の展開を面白くするためにはどうするか」「自信をもって歌えるようにするためにはどうしたらいいか」など、話し合いの内容が絞られていたため、幼児同士で話を進めることができたと感じています。また、日頃から少しずつ話し合い、教師の助けを受けながら自分たちで決める経験を積み重ねることで、幼児の間で自由に思いを表現してよい関係性ができ、思いをありのまま表現できるようになったのではないかと思います。

このような思いを伝えたり受け止め合ったりする経験をすることで、Ⅱ期以降では、教師との対話だけでなく、子ども同士が対話をしながら学んでいく姿勢につながっていくと思われます。

そして、共通の目的に向かってみんなで意見を出し合って決めたことをやり遂げる経験が、Ⅲ期以降の学習においても、自分たちで主体的に考えて活動に向かう意欲につながるのではないかと思います。

事例17 Ⅱ期（1年生 4月）  
「ことばのとびら」-国語科-  
「こんな もの みつけたよ」

事例を読み取る  
キーワード

ことばの  
とびら

<事例で伝えたいこと>

この事例では幼児期の経験を生かしながら、生活科の学校探検で気付いたことをもとに、自分が伝えたいことを友達に話す活動を行います。「どこで」「何を」見つけたのか、見つけたときにどんな気持ちだったのかを伝えることで、話す楽しさを感じられる児童の姿について考えます。

① 内容

○単元「こんな もの みつけたよ」

【目標】

- ・身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。
- ・丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気をつけて使うことができる。
- ・紹介したい事柄を積極的に選び、学習課題に沿って見つけたものをより分かりやすく紹介することができる。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・生活科の「なかよしいっぱいがっこうたんけん」の学習と関連させ、学校の校舎の案内図を提示し、児童がどの場所やものに関心をもち、友達に伝えたいかを明確にした。
- ・学校探検の際、ミニカードに見つけた場所やものの絵を描かせた。そのミニカードをもとに伝え合う活動を行った。
- ・入学からまだ1か月たたない時期なので、児童によってはまだ友達関係を十分に築けていない場合もあるので、話す相手をまずは隣の席の児童に設定し、不安を少なくできるようにした。

【幼児期の経験を生かす】

- ・幼児期には、自分の思いや考えを言葉で先生や友達に表現することを経験的に積んできている。その経験を大切にしながら、必要な事柄を選んで伝える活動を行った。
- ・友達の発言に対して、同じ意見だったり、いいなと思ったりしたときに、「いいね。」「私も同じです。」などの肯定的な意見に対しては褒めて、全体で認め合える雰囲気を作っていく。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

T：生活科の時間に、学校探検に行きましたね。どこに行きましたか。

C：学校の玄関です。

C：4階の音楽室に行きました。

C：校長室です。

(学校の校舎の案内図を黒板に掲示し、発表するときどここの場所かを確認した。)

T：みなさん、いろいろな場所に行きましたね。何か見つけたものはありますか。

C：玄関には大きな時計と、あと…兜がありました。

C：校長室の前にポストがありました。

C：音楽室の先生のお名前を教えてくださいました。

T：いろいろなものを見つけられましたね。今、みなさんにお話ししてくれたお友達は、二つのことを話していました。

C：行ったところと、何があったか。

T：そうですね。『場所』と『見つけたもの』ですね。(『ばしょ』と『みつけたもの』を板書する。)では、お隣のお友達に自分が見つけたものや気になったものをお話してみましよう。

T：絵を描いたカードを見せて、お話しするといいですよ。

(隣の席の児童と見つけた場所と、ものを伝え合った後、)

T：伝え合ったことを、みんなにお話できますか。

C：ぼくは、学校の玄関で大きな時計を見つけました。でも、動いていなかったのが不思議でした。

T：あら、動いていなかったのですか。

C：はい。時計なのになんでだろう、と思いました。

T：今、〇〇さんは、不思議に思ったことも話してくれましたね。自分の思ったことも伝えると分かりやすいですね。

## ②「ことばのとびら」の実践を通して、「接続」の部分の理解を深める。

児童にとって、「言葉」の獲得は幼児期から始まっていて、児童によって獲得している語彙数や理解には違いがある。それらの経験を踏まえて「接続」の部分では、担任と児童、児童同士での学び合いによって、さまざまな言葉を共有し獲得したり、再認識したり、話し方を学んだりすることで「言葉」への興味関心がさらに深まっていくと考える。

## ③「国語科」の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

この単元は、生活科の学校探検の活動をもとに、気づきや発見したことを言葉にして伝える活動である。児童が幼児期に生活してきた施設と学校施設の違いや似ているところに気づき、「友達に伝えたい!」と思う事柄を、生活科では絵を描いて表現し、国語科では言葉で表現していく。その際に、相手に分かりやすく伝えるにはどうすればよいか。本時例では「どこに」「何があるのか」「その時の気持ち」の三つを児童と確認することで、児童が安心して話すことにつながられる。つまり、児童の「伝えたい。」という思いを学習の中に取り入れていくことが大切だと考える。

④ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

入学して間もない児童ですが、学校への興味や関心はとても高く、期待をもって、楽しみにしている児童が多いです。しかしながら、さまざまな幼稚園・保育園等から入学してくる児童の中には友達との関わりに不安をもっている児童もいます。

Ⅰ期からⅡ期の初めまでの園生活の中で経験してきた「自分の思いや考えを言葉で表現することや伝えること」について、本事例では、小学校初めの段階にペアで取り組むことで、「話すこと」への抵抗感を減らし、グループや全体での発表に促していくことができたと思われます。ペアや小グループでの伝え合いの学習は、本事例に限らず、この後の単元においても、引き続き多く取り入れ、積み重ねていくことで、相手意識をもって「何をどのように伝えたらよいか」「相手にわかりやすく伝えるにはどのようなことに気を付けたらよいか」を経験的に学んでいけるのではないかと考えます。

**事例18** Ⅱ期（1年生4月）  
「ことばのとびら」—国語科—  
—「よくきいて、はなそう」  
自分の思いを言葉で伝え合う—

事例を読み取る  
キーワード

ことばの  
とびら

<事例で伝えたいこと>

この事例では、幼児期の経験を生かしながら友達と対話することにより、相手意識や目的意識をもって話したり聞いたりする活動をする児童の姿について考えてみます。

① 内容

○教材「よくきいて、はなそう」（光村図書1年上 かざぐるま） 第1・2時/2時間

【目標】

- ・話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように聞くことができる。
- ・伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫することができる。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・学級に少しずつ慣れ、友達ともっと仲良くなりたいという気持ちが出てきた頃に学習活動を設定し、「友達のことをよく知りたい。」「友達ともっと仲良くなりたい。」という目的意識をもてるようにした。
- ・対話の相手が明確になるように、話し手と聞き手が向かい合って座れるような環境構成を行った。また、どちらかが一方的に話すのではなく、互いに話したり聞いたりする「対話」となるようにしたい。そのため、会話のキャッチボールを意識できるように、実際にボールを渡し合いながら対話をするようにした。
- ・好きな遊びを伝え合ったあとに一緒にその遊びをする時間を設定することで、伝え合ったことを実際の場で生かせるようにした。

【幼児期の経験を生かす】

- ・導入の段階で、幼児期に友達と楽しく遊んだ経験を想起させ、小学校でも友達と一緒に遊びたいという思いを高めた。そのことにより、友達と好きな遊びを伝え合いたいという必然性をもたせた。
- ・幼児期に友達と話をして楽しかった経験を想起させることで、言葉を使って伝え合うことの楽しさや必要性を感じさせるようにした。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

T：お友達ともっと仲良くなるために、みんなはどんなことがしたいですか。

C：一緒に遊びたいです。

T：では、お隣のお友達と好きな遊びを教え合いっこしましょう。

どんなことに気を付けて教え合いっこするといいいですか。

C：お友達のお話をよく聞くといいと思います。

T：お話を最後までよく聞いてもらえると、お話ししている人も嬉しいですね。

C：教えてもらったら、お礼を言ったり、お返事をしたりします。

T：それはいいですね。お話しする人と聞く人が順番にお話しできるといいですね。

では、今日はボールを使って教え合いっこをしてみましょうか。お話ししたら持っているボールを相手に渡して、今度はボールをもらった人がお話ししてみましょう。たくさん続くといいですね。

#### <二人組での対話>

T：(活動の途中で上手なペアを見つけて) C1さんとC2さんは、とても上手に教え合いっこしていますよ。みんなの前でお話ししてください。

C1：〇〇さん、好きな遊びはなんですか。

C2：おにごっこが好きです。

C1：どこでおにごっこをしているの？

C2：花壇の前でやっているよ。

C1：今度ぼくも入れて。

C2：いいよ。一緒にやろう。

T：どんなところが上手でしたか。

C：たくさんボールが行ったり来たりしていました。

T：そうですね。お友達のお話をよく聞いて言葉を返すのが上手でしたね。

C：今度一緒に遊ぶ約束もしていました。

T：お友達と上手にお話しすると、もっと仲良くなれそうですね。

#### ② 「ことばのとびら」の実践をとおして、「接続」部分の理解を深める

日常生活の中で自然に使っている言葉ではあるが、国語科の授業ではその言葉そのものが学習対象となり、その使い方や楽しさを学んでいくことになる。言葉は、様々な人とのコミュニケーションだけでなく、自分の思考を働かせたり深めたりするためにも必要不可欠なものである。幼児期に、生活の中で言葉に触れたり言葉を広げたりした経験を国語科の学習につなげ、言葉の適切な使い方やよさを価値付けることができるようにしていきたい。

#### ③ 国語科の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

「架け橋期」には、特に「言葉」の大切さや楽しさに目を向けられるような働きかけをしていきたい。子どもたちは毎日「言葉」に接している。日常的に使っているからこそ、幼児期に子ども自身が言葉自体について意識的に考える機会はありませんと思われる。幼児期に本の読み聞かせをしてもらったり、友達との関わりの中で自分の気持ちを伝えたりした経験を生かしながら、「言葉」が人間関係を構築する上で大切な役割を果たすものであることや、だからこそ言葉を適切に使えるようになる必要があること、そしてそれを学ぶ教科が国語科であることを1年生なりに感じ取らせたい。



#### ④ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期への振り返り）

この時期の姿として、自分の思いや感情を伝えようとする気持ちは強いのですが、他者の言葉に耳を傾け理解しようとするはまだ難しい子どもたちです。この時期の子どもたちだからこそ、ボールの受け渡しという目に見える形での対話を取り入れたことで、伝え合うことの必要性を感じ取る第一歩とすることができたと思われます。

今後、Ⅲ期に向けては、国語科の学習に限らず様々な場面で友達との対話が必要になってきます。言葉による適切な表現や理解は、すべての活動の基礎として大切にしたい力であることから、ここで学習したことを基に、あらゆる場面で継続的に対話の機会を取り入れることが、子どもたちの話す力・聞く力の向上につながり、さらには言葉による表現力や理解力の向上につながるだろう。

事例19 Ⅱ期（1年生 7月）  
「好きなこと、なあに」-国語科-

事例を読み取る  
キーワード

・「話すこと」  
「書くこと」で、  
自分の思いを  
伝える。

<事例で伝えたいこと>

この事例では、4月の「よくきいて、はなそう」で学習した、話したり聞いたりすることで思いを伝え合う活動をもとに、「話すこと・聞くこと」から「書くこと」へつなげる表現力を習得させる活動を取り上げます。文字を習得しつつある子どもたちに、話すだけでなく、文字でも自分の思いを伝えることができるという喜びを感じさせられる事例になればと思います。

① 内容

○単元「好きなこと、なあに」 第4～6時/7時

【目標】

- ・身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶことができる。
- ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫することができる。
- ・丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて使うことができる。
- ・相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えることができる。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・4月の「よくきいて、はなそう」の学習を想起させ、上手にやりとりすることで友達ともっと仲良くなれたことを導入段階で取り上げることで、学習意欲を高めた。
- ・まずは自分の好きなことを隣の友達に話すという対話の形をとり、理由を質問されることにより、理由を付け加えたほうが分かりやすいということを感じ取らせる。次に、3～4人のグループの中で、理由を付け加えた2文でのスピーチを行う。さらに、それをもっと多くの人に伝えたいという思いから書き留める必要性をもたせ、簡潔に2文で書き表す活動につなげる。話すことによる表現から書くことによる表現への広がりを求めるため、スモールステップで無理なく活動できるようにした。
- ・対話やグループでのスピーチのときには話し手と聞き手が向かい合う形をとり、互いに相手意識が明確にもてるようにした。また、机が必要ないときには椅子だけで向かい合う形をとり、互いに話しやすい・聞きやすい距離になるようにした。

### 【幼児期の経験を生かす】

- ・ 幼児期や小学校入学後に友達や教師と言葉を交わすことで相手のことをよく知ったり、より仲良くなったりした経験を想起させ、学習意欲を高めた。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T＝教師 C＝児童

T：前の時間にグループでお話したことを、もっとたくさんのお友達やおうちの人、先生たちに知らせたいなという声があがりました。おうちの人や先生たちなど、教室にいない人にはどうやって伝えたらいいかな。

C：文字で書いて読んでもらったらいいと思います。

T：それはいいですね。では、前の時間にお話した、自分の好きなこととその理由を文に書いて、たくさんの人に伝えることにしましょう。今日のめあては、『自分の好きなことを、かいてつたえよう。』でいいかな。(めあてを板書)

T：まずは、どんなことに気を付けて書いたらよいか、お手本をよく見て、先生と一緒に練習しましょう。

C：はじめに名前が書いてあります。下の方に書くんだね。

C：『ぼくは』の前が1ますあいています。

C：点（、）や丸（。）は、2のお部屋（ますの右上）に書いています。

T：みなさん、よく書けましたね。では、今度は自分の好きなことをみんなに伝える文を書きましょう。

C：『ゆ』ってどう書くんだっけ。

T：分からない字は、ひらがな表を見ていいですよ。

T：書き終わったら、書いた文字を指で押さえながら声に出して読んでみましょう。

C：あ、まちがえた。『やきう』じゃなくて『やきゅう』だ。

T：よく気付きましたね。間違えたところは書き直しましょう。できたら、お友達にも読んでもらいましょうね。

C：□□さん、『ぼくは』が『ぼくわ』になってるよ。

C：文の終わりには丸（。）をつけるといいよ。

C：○○さんの好きなものは私と同じだけど、理由が違うな。

T：いいところに気が付きましたね。次の時間はみんなで読み合ひましょうね。

## 2 「国語科」の学習の始まりから考える意義

国語科では、言葉そのものが学習対象であり、言葉の大切さやよさを感じ取らせることが大切である。この時期の子どもたちは、日常生活の中で何気なく言葉を使っているものの、言葉そのものについて考えたり、使い方を意識して言葉を使ったりする経験はほとんどないのではないか。しかし、どの教科の学習でも言葉による表現や理解は必要であり、国語科はすべての教科の基本となる教科であるとも言える。そういった意味から考えると、Ⅱ期では、子どもたちが言葉の大切さやよさを実感できる経験を多く積ませたい。よりよい言葉を選択することで自分の思いが相手に伝わったり、言葉を介したコミュニケーションによってよりよい人間関係が構築できたりする経験を積ませ、教師がそれを価値付けたり言葉のよさを意識させる言葉掛けしたりすることで、子どもたちは言葉のよさに気づき、言葉の学習をしたいという意欲を

高めることができると思う。

### 3 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

前述したとおり、Ⅱ期の子どもたちには、言葉の大切さやよさを実感させたいと考えます。この事例で取り上げた「話すこと」や「書くこと」は、国語科に限らず、自分の思いを表現する重要な手段です。

Ⅰ期には文字を書く活動はほとんどありませんが、その前段階として、友達や先生、家族と言葉を交わし、自分の思いを表現する経験を多く積んでおくことがとても重要となります。

そして、Ⅱ期で「話すこと」「書くこと」による表現や「聞くこと」「読むこと」による理解の基礎を学び、それがⅢ期以降、より適切な言葉の使い方を習得することにつながるのではないかと考えます。

事例20 II期（1年生5月）

「運動遊びのとびら」—体育科—  
—遊びを通して体を動かす面白さを味わおう—



<事例で伝えたいこと>

この事例では、「もっとやりたい」「○○でもできるかやってみよう」という子どもが運動に対して抱く意欲や期待を大切にしています。子どもが自己決定や有能さの認知を繰り返し行うことができるような環境を工夫することで、運動の面白さを味わえるようにしたいと考えます。

① 内容

○単元「体づくり運動」 第1時/ 6時間

【目標】

・多様な動きをつくる遊び方を工夫したり、考えたことを他者に伝えたりすることを通して体のバランスをとったり、体を移動したりする基本的な動きをできるようにする。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・子どもが体を動かすことの面白さを存分に味わいながらも、基本的な動きのレパートリーを身に付けることができるようにする。
- ・全ての子どもが恐怖心を抱かず達成することに自信をもって取り組めるような課題を設定するとともに、「もっと工夫をしてみたい」という気持ちをもてるような意図的な環境設定（本単元では綱渡り）を行うようにする。
- ・子どもが安全についての心構えを身に付けたり、他者とともに体を動かしたり意見を交わしたりすることの面白さに気付くような教師の言葉かけを行うようにする。

【幼児期の経験を生かす】

・子どもたちは幼児期にも多様な運動を経験してきている。しかしながら小学校では到達目標に伴った教科カリキュラムが設定されているがために、幼児期の方向目標に伴った経験カリキュラムがないがしろにされてしまう場合も少なくない。教科カリキュラムを子どもたちに押し付けるのではなく、子どもたちの経験してきたことをもとに、教材を設定することで、心理的安全性に基づいたフロー状態の中で存分に体を動かすことができる考える。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

（体育館や校庭に向かう前から児童を遊びの世界に誘うことができるようにする）

T：さあ、今日の体育ではみんなに忍者のようにかっこいい体の使い方をしてもらおうよ！

忍者みたいに忍び足で行けるかな…？

（縄の下にブルーシートを敷き、場が川であることを児童がイメージできるようにする）

T：今日はこちら（線）からあちら（線）まで縄の上を歩いていけるかやってみましょう。

縄は橋で、縄から外れたらワニに食べられてしまうよ！

C：簡単だよ！

C：わたしもできたよ！

C：手でバランスを取ったら上手にできた！

T：みんな上手ですね。もっと「かっこよく」できる方法はありませんか？

C：わたしは走っても縄から外れずにいけるよ！

C：わたしは後ろ向きでいってみようか。

C：わたしは片足のけんけんでいけるかやってみる！

C：わたしはスキップでもできたよ！

T：みんな色々なかっこいい動きができましたね。じゃあもっと難しくしてもできるかな？

縄の形をどんな風に工夫したらもっと難しくなるかな？

C：縄をぐねぐねに置いてぐねぐね道に変えてみよう！

C：お友達と手をつないで横歩きでいってみようかな。

C：途中で段ボールを置いてジャンプして飛び越えてみたい！

T：どんどん工夫が出てきて面白いね。お友達の工夫したことができるかやってみよう！

あと、お友達の考えた工夫と自分の考えた工夫を合体できることはできるかな？

C：ぐねぐね道の途中で段ボールを置いてみようかな！

C：手をつないで2人で片足けんけんできるかやってみよう！

T：みんなが考えた「遊び方の工夫」や「動き方の工夫」は先生が掲示物に残しておきますね。

次はもっと工夫をしたり、かっこいい動きをしたりできるか、みんなで考えながら遊びましょうね。

## ② 「運動遊びのとびら」の実践をとおして、「接続」部分の理解を深める

・特に、単元導入の第1時ではルールや行い方を細かく説明しすぎるがために活動時間が減ってしまったり、子どもの自己決定を制限してしまったりする事例が散見される。子どもの自己決定の結果、動きのレパートリーやバリエーションの多様さが引き出されるようにしたい。また、運動遊びの学習では、環境にアフォーダンスされやすい子どもたちの発達段階を考慮し、音楽や場の設定にこだわり、その世界観に没入できるようにしたい。一方、「忍者」「動物」などの世界観を強調しすぎると、「忍者走り」や「手を横に振り象の鼻に見立てる」など、本時で扱う運動の本質的な面白さから乖離した「真似っこ動き」に工夫の視点が向いてしまう可能性があるため、十分に留意したい。

## ③ 体育科の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

体育科は歴史の流れに大きな影響を受けてきた教科である。「身体を鍛える訓練」や「規律や協調性を学ぶ訓練」の道具として用いられてきた歴史は、今日の体育科にも大きな影響を及ぼしているといえよう。その結果、未だに「笛を吹いていかに早く集まることができるか」「美しい『前へならえ』や『体操座り』」などの集団行動の質が体育科授業の成否であるように語られることも少なくない。

幼児期に運動遊びを存分に楽しんでいた子どもたちに、「小学生になったのだから」という

理由のみで、急に集団行動の訓練を押し付けられる「体育科との出会い」では、体育科の目標である、豊かなスポーツライフの実現を目指すことは難しいであろう。もちろん運動会や遠足などの学校行事、災害時の対応を実践する避難訓練を通して、子どもたちが規律や集団行動を学ぶことの価値は否定されるべきではない。しかしながら、架け橋期の子どもたちに、「集団行動を教える」という目的のために体育科教育が利用されているのであれば、改めて運動（遊び）のもつ本質的な教育意義について問い直す必要があるであろう。

④ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期への振り返り）

遊びとは「自己決定と有能さの認知を追求するために内発的に動機づけられた状態」であると定義付けられており、指導者が運動を主導する群と遊びとして運動している群の運動能力を比較した杉原（2010）によると、遊びとして運動をしている方が運動能力は高まることを明らかにしています。そのため、幼児期や低学年の子どものための運動遊びプログラムを企図する場合、子どもの「内発的動機づけ」を大切に「自己決定」を繰り返すことができるような指導者の仕掛けが重要です（吉田、2023）。

幼児期と低学年の子どもにとって身に付けるべき運動能力については、文部科学省、スポーツ庁ともに、中村和彦の示す「36の基本動作」に依拠しており、この「36の基本動作」を身に付けることを運動指導の主たる目的としています。そして、この基本動作を身に付けていく過程において、「①レパートリーの多様さ（いろいろな動きを幅広く）」、「②バリエーションの多様さ（基本的な動きの変化）」が肝要であるとされており（文部科学省、2012）、そのためには子どもの自由度が十分に担保されたうえで指導者が意図をもった「教材」「環境」「活動」が工夫されていることが重要であると考えられます。

事例21 II期（1年生6月～7月）  
「ボールを投げて遊ぼう！」—体育科—  
—遊びを通して体を動かす面白さを味わおう—



<事例で伝えたいこと>

本事例でも、「もっとやりたい」「○○でもできるかやってみよう」という子どもが運動に対して抱く意欲や期待を大切にしています。子どもが自己決定や有能さの認知を繰り返し行うことができるような環境を工夫することで、運動の面白さを味わえるようにしたいと考えます。

① 内容

○単元「多様な動きをつくる運動遊び」「投の運動遊び」 第1時/ 6時間

【目標】

・投げ方を工夫したり、考えたことを他者に伝えたりすることを通して、目的に合った投げ方を身に付けることができるようにする。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・子どもが体を動かすことの面白さを存分に味わいながらも、基本的な動きを身に付けることができるようにする。
- ・全ての子どもが自信をもって取り組めるような課題を設定するとともに、「やってみよう」という気持ちをもてるような意図的な環境（本単元では多様なボール投げの場の）設定を行うようにする。
- ・子どもが安全についての心構えを身に付けたり、他者とともに体を動かしたり意見を交わしたりすることの面白さに気付けるような教師の言葉かけを行うようにする。

【幼児期の経験を生かす】

・子どもたちは幼児期に多様な運動を経験してきている。しかしながら「投げる」という遊びに関しては、制限が設けられている園が多いことが想定される。加えて、港区の公園においても「投げる」遊びに制限が設けられている場合が大半であり、幼児期の子どもたちの「投げる」という経験は個人差が大きいことが想定される。そのため、様々なボールやボール以外の柔らかく当たっても痛くない多様なものを思う存分投げる機会を小学校体育の学習において担保できるようにしていきたい。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

（「遊び」であるため、児童の自由度を担保したい。しかし用具を扱う運動においては、安全面のきまりについて端的に共有した上で、活動に向かわせたい。）

T：今日は投げる遊びを「楽しく」しよう！「楽しくない」遊び方ってあるかな？

C：ひとりでいくつも使ってひとり占めする。



C：投げないで蹴ったり持って走ったりする。

C：人に向かって投げて当てる。

T：では、「投げて遊ぶ」「一人3個まで」「人に当てない」をきまりにして遊びましょう。

(倒したくなる的には「鬼」などの少し怖いイメージのイラストを描いておく。越えたいくなる場には線と共に得点を記載しておくなど、児童が環境に誘われるような工夫をしておく)

T：みなさんと投げて遊ぶために、いろいろな種類のボールや的をたくさん準備しました！

それぞれの場ではどんな遊び方ができそうですか？(活動の見通しをもてるようにする)

C：わたしはあの的を倒せるくらい強く投げてみる！

C：わたしはあの網を越えられるよう高く投げてみる！

C：わたしはあそこまで届くか遠くに投げてみる！

T：それでは、みんなで楽しく「投げて」遊びましょう！

C：やったー、的を倒せたよ！

C：簡単だよ、もっと強く投げてみよう！

C：〇〇さん、一緒に投げよう！

T：みんな楽しく投げることができましたね！どんな遊び方をしたら楽しく遊べたかな？

C：友達とせーので投げて二人で的を倒したよ！

C：この(手前の)線から投げて届くか挑戦したよ！

C：もっと多くの的を一度に倒せないかの的を二つ積み重ねてみたよ！

T：どんどん工夫が出てきて面白いね！どうしたら「倒せたり」「届いたり」「越えられたり」したの？体の使い方でも工夫したことはなんですか？

C：腕は力いっぱい振るとよかったよ！

C：走って勢いをつけるとよかったよ！

C：上を見ながら投げるとよかったよ！

T：次も「投げる」遊びをします、どんなことをしたらもっと楽しく遊べそうですか？

C：もっと倒したくなる的を自分たちで作ったり、置き方を工夫したりしたい！

C：もっと難しくなるようにして、それでもできるかチャレンジしたい！

(遊びではあるが、「投げる」学習から逸れないよう、次の学習のめあてや工夫の視点を共有した上で授業を終えられるようにする)

## ② 「運動遊びのとびら」の実践をとおして、「接続」部分の理解を深める

- ・子どもが運動遊びを通して自己決定を繰り返した結果として、多様な投げる動きを経験できるようにしたい。「投動作」というクローズドスキルにおいても動きの洗練化をねらうのではなく、あくまで「遊び」として色々な投げ方を体験することを学習の重点としたい。

## ③ 体育科の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

体力テストの結果、本区の投能力は他地区と比べ高くないという課題がある。これは先述の通り、幼児期の経験不足、小学校における投の運動に親しむ機会の減少が理由であると考えられる。しかしながら、体力テストという切り取られた結果を向上させようとする「訓練化した体育授業」では、「架け橋期」に求められる「遊び」からの発展という文脈とはかけ離れてしま

うであろう。

加えて、学習指導要領解説小学校体育編（文部科学省，2015）によると、低学年のすべての運動領域が「○○遊び」という表記に統一されており（ボールゲームの領域においては「ゲーム」という表記があるが、この場合そもそも「ゲーム」が遊びであるという主張に依拠する）、Ⅱ期の後半になったからといって、遊びから運動に無理に移行させる必要のないことが窺える。

実技教科であるがゆえ、ついつい効率的な動き方を一律的に指導したくなる体育科ではあるが、以上の理由に伴い、Ⅱ期の体育科の学習においては遊びの要素（自己決定と有能さの認知を追求するために内発的に動機づけられた状態）を十分に意識した指導計画としたい。その際、運動のもつ本質的な面白さを味わうことが可能となる意図的な環境構成が肝要になるであろう。

#### ④ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期への振り返り）

本事例では、「タオルを巻いたティーボール（写真上）」

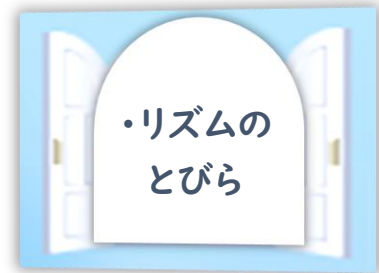
「ガムテープを巻き付けた風船（写真中）」、「緩衝材を入れたビニール袋（写真下）」という材を用い、越えたいネットや当てたい的、落としたいシート、などの環境を設定した。

Ⅱ期では達成や成功を到達目標にせず、Ⅲ期においても体を動かすことは「面白い」「もっとやってみたい」という思いをもつことができるようにしたい。運動の本質的な面白さに誘われる「材」や「環境」を教師は意図的に設定できるようにしたい。



## 事例22 II期(1年生 4月)

「からだでひらく リズムのとびら」— 音楽科—  
— あそびからまなびへ  
音でつながり、自分らしく表現する姿を育むために—



### <事例で伝えたいこと>

この事例では、幼児期に親しんだリズムや身体表現の経験を生かしながら、音楽の授業を通して「自分を表す」「友達とつながる」活動を行います。体を使って音を感じたり、友達と音を交わしたりすることの楽しさを味わう中で、子どもたちは音楽のもつ「つながる力」に出会っていきます。

### ①内容

(ア)○題材名「みんなで ひらく おとのとびら」 第1時/1時間

#### 【目標】

- ・幼稚園・保育園等で歌ったり聴いたりした歌やリズム遊びを想起して、音楽科の学習への期待をもつ。

#### 【担任教師が心掛けたこと】

- ・幼稚園・保育園等で歌っている歌や音楽遊びなど、子供たちが安心して歌ったり身体を動かしたりできる教材を選ぶ。
- ・知っている歌もあれば、知らない歌もあることが予想されるが、知っている歌があれば自信をもって歌えるよう働きかける。
- ・「(音楽は)楽しい時間」となるように、「いつの間にか」自然に子どもたちが音楽室での学び方が身に付くよう、展開に変化をもたせながら進める。

#### 時間配分の工夫(例)

音楽遊び(5分) → 歌唱(10分) → リズムの活動(5分) → 歌唱(10分) →  
→ リズムの活動(10分) → 音楽遊び(5分)

- ・音を体いっぱいを感じられるように、体の動きを伴った活動をたくさん行い、そこから子どもたちが何かに気付けるようにする。
- (音楽が止まったら動きを止める、速度に合わせて行進するスピードを変える、音の強弱によってしゃがんだり背伸びしたりする など。)

#### 【幼児期の経験を生かす】

- ・教室とは違い、机をなくし、広く使える音楽室の空間を確保する。
- ・自由に動ける場の設定、手拍子や動きを楽しめる雰囲気づくりを行い、幼児期の遊びの延長のように学びに入っていけるようにした。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

導入部分

T：(教科書の絵を見て) みんなが知っている歌はあるかな」と知っていそうな歌をBGMとして伴奏する。

C：これ知ってる！チューリップだよ(他の子どもも「知ってる！」「聞いたことあるよ」という)

T：知っている人がたくさんいるね。では、みんなで歌ってみよう。

♪ チューリップ ♪ こどりのうた ♪ いぬのおまわりさん など 歌う。

C：簡単だよ。

T：ほかに何の歌が隠れているか、わかったかな？

C：(「ぞう」「ありさん」など、指差ししながら)

T：みんな、よく知っているね。手を叩いていた人もいたね。〇〇さんが♪「ありさんのおはなし」の歌のとき、手を叩いていたのを見つけちゃった。〇〇さん、ちょっとやってみて。

楽しそうだから、教えてほしいな。

C：♪ありさんのおはなし、聞いたかね、タンタン♪。ってやるの。

T：もう1回、やってみて(伴奏を付ける)。

C：他の幼児も、真似をして手を叩く。

T：なんだか楽しそうだね。

みんなもできそうだね、〇〇さんのようにやってみよう。

♪ありさんのおはなし、聞いたかね、タンタン♪

T：みんな上手だね。そんなふうに遊ぶのも楽しいね。

(手を叩いたり体を動かしたりして遊ぶ展開へ)

(イ) ○題材名「つながるリズムで はじめの一步」 第1時/2時間

【目標】

- ・音楽を通して自分を表現する楽しさを味わう。
- ・リズムや身体表現を通じて友達とつながる喜びを感じる。
- ・幼児期に親しんだ「まねる・たたく・動く」活動を生かして音楽に親しむ。

【担任教師が心掛けたこと】

- ・幼児期の「まねる・動く・音でやり取りする」経験を生かし、児童が身体で音を感じ取れる活動を中心に取上げた。
- ・音に対して自然に反応できるよう、広い空間でゆったり動ける安心できる環境づくりを心掛けた。
- ・友達と音を合わせたり、リズムでやり取りしたりする中で、音の違いや変化に耳を向ける姿が引き出されるようにした。
- ・「できる・できない」ではなく、感じた音をそのまま表す楽しさを大切にし、音楽の学習への期待感を育てることを意識した。

【幼児期の経験を生かす】

- ・幼児期に経験してきたリズム遊び、手拍子、まねっこ遊び、表現遊びといった身体的な表現経験を引き出し、音を通じた非言語コミュニケーションにつなげた。
- ・「自分の名前」や「こんにちは」など、馴染みのある言葉や生活経験を使うことで、自然に音楽に親しめるようにした。
- ・教室とは違い机がなく広く使える音楽室の空間や、自由に動ける場の設定、手拍子や動きを楽しめる雰囲気づくりを行い、幼児期の遊びの延長のように学びに入っていけるようにした。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=子ども

◆「こんにちはリズム」→「名前リズム」

T:「先生の『こんにちはリズム』を聞いてみてね。タン・タタ・タン♪」

C:(何人かがまねして)「タン・タタ・タン♪」

T:「みんなの“こんにちは”は、どんなふうになるかな？

できそうな人は、やってみてもいいよ。」

C:(おそろおそろ手拍子)「タン・タン・タン」

C:(それを聞いた別の児童が)「わたしもできるよ！」

T:「いいね。いろんな“こんにちは”があるんだね。」

(※ 子どもの“少しやってみようかな”を拾って広げる)

T:「いまの手拍子、何かの名前みたいに聞こえたよ。自分の名前でもできるかな？やってみたい人、いる？」

C:「り・く・と！」(手拍子)

T:「いいね！今のリズム、りくとさんっぽいね。」

C:「さ・く・ら！」(手拍子のみ)

T:「さくらさんもやってくれたね。名前の言い方でリズムがちょっと変わるの、おもしろいね。」

(※ “やってみたい人” と言うことで、強制ではなく選択肢として提示)

T:「このリズム、手だけじゃなくて体でもできそうかな？やってみたい人は、やってみてもいいよ。」

C:(手拍子に合わせて軽く体をゆらす)

C:「こうしてもいい？」(胸の前でポンと叩く)

T:「いいね。さくらさんのリズム、動きが入るともっと楽しくなるね。」

(※ 動きが出た理由が“子ども発”になるようにする)

◆ リズムをつなげる

T:「いろんな名前のリズムが出てきたね。せっかくだから、ならんでやってみるとどうなるかな？」

C:「やってみたい！」「つなげたい！」

C:「り・く・と！」「さ・く・ら！」(順につなげる)

(※ “ならんでやってみる？” という軽い提案 → 自然に「つなげる」に発展)

T:「みんなのリズム、今のまま続けると長いリズムになるね。音楽みたいになるかもしれない。やってみたい人は、続けてみようか。」

C:「やりたい！」(テンポを合わせて手拍子リレー)

T:「動きも入れてみたい人は、入れてみていいよ。」

C:(前進したり、軽くジャンプしたり、隣の子を見てまねしたりする)

C:「〇〇くんのジャンプすごい！」

(※ 子ども発の動き → 他児が反応 → 活動が広がる)

◆ まとめ

T:「みんなのリズムがつながると、ひとつの音楽みたいになるね。最後に、クラスみんなでやってみようか。」

C:「やってみたい！」

#### ⑤ 「リズムのとびら」の実践をとおして、「接続」部分の理解を深める

この実践から、「接続」をより豊かにしていくためには、幼児期の感覚的・身体的な経験を丁寧に受けとめ、小学校の学びに自然に取り込める形へと「橋渡し」していくことが求められる。音や動きを通じた遊びのようなやり取りを大切にすることは、言語による説明だけでは引き出しにくい、子どもたちの内発的な表現欲求を育む土台となる。

また、表現を共有できる雰囲気や場の設定も「接続」を深める鍵となる。例えば、広い空間で自由に動けることや、ペアや全体での活動を通して友達と関わる構造にすることによって、学びの中に「関係性」が育まれていく。こうした環境の工夫は、幼児期から小学校への学びの連続性を意識した実践の中で、今後さらに追究していく価値がある。

#### ⑥ 音楽の学習の始まりから考える「架け橋期」のポイント

音楽科の学びの出発点において大切なのは、「できる・わかる」以前に「音楽って楽しい」「またやりたい」と感じられる体験である。幼児期の遊びの延長線上にある音楽活動を通して、音への親しみや安心感をもって学びに入っていくことが、「架け橋期」の重要なポイントである。

この実践では、子どもたちは音を通じて「つながる」ことの楽しさを実感し、自然と自分を出し、友達を受け止める姿が見られた。そこには、言葉ではなく音や動きを使ったコミュニケーションがあり、表現の土台となる「音楽的な関わり」があった。

架け橋期においては、こうした活動が「音楽すること＝自分を表すこと・つながること」として、学びの基盤となるよう、安心感や肯定感のある導入を設けていくことが重要である。

#### ⑦ 事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期への振り返り）

この事例を振り返ると、音楽科の導入において「自分を表す」「友達とつながる」といった体験が、子どもたちの内面にある表現への意欲を引き出し、音楽を通じた対話の楽しさが学びの土台となることが明らかになった。

Ⅰ期では、音や動きによる遊びを通して、自分の思いやイメージを表したり、友達と関わったりする経験が豊かに育まれていた。本実践では、その経験を手がかりに、音楽を通じて安心して表現する姿が見られ、幼児期の学びが小学校の学びへと自然に接続されたことを実感できた。

Ⅲ期に向けては、音楽のもつ“伝え合う力”をさらに発展させていけるよう、活動の中に「共につくる」「共有する」といった要素を取り入れながら、子どもたちが音楽を通じて自己を深め、他者と豊かに関わる力を育んでいく必要があると考える。



\*環境の構成(場の設定の工夫)

- ・板書や映像を見る場合、教師の説明を聞いたり、新しい歌を覚えたりするとき(教師→子ども)



- ・リズムの活動や身体表現をする場合→子ども同士が互いのリズムや動きを見合うことができるようにする。  
(子ども⇔子ども)(子ども⇔教師⇔子ども)



- ・教室前方を自由に活動できる場、後方に椅子を配置する。音楽に合わせて行進をしたり、身体表現をしたりする活動をグループごとに行うときの配置。互いに見合い工夫を見付ける。



## 事例23 Ⅱ期（1年生6月～9月）

事例を読み取る  
キーワード

「みのまわりの おとに みみを すませよう」  
—音楽科—  
「この音、わたしのすきな音！」

・聴き合って  
つなげる

### <事例で伝えたいこと>

この事例では、4月の「つながるリズム」の活動で育まれた、音に反応する・友達の音に応えるといった感覚を土台に、身のまわりの音に改めて耳を傾け、自分の感じた音を選んでつなげる活動を行います。

「ながい音」「やさしい音」など、生活の中で出会う音の違いに気付いたり、友達の音を聴いて「いいね」と伝え合ったりする中で、児童は音の特徴を感じ取りながら、音で関わる楽しさを味わっていきます。

身のまわりの音を素材にして簡単な音楽づくりを行うことで、児童は「音を選ぶ」「つなげてみる」「聴き合う」といったⅡ期らしい学びを重ね、音楽が「自分の発想を生かせる活動」であることを感じていきます。

### ① 内容

○題材名「みのまわりの おとに みみを すませよう」 第1時/全2時間

#### 【目標】

- ・身のまわりや楽器の音の特徴を聴き取り、その違いや面白さに気づき、見つけた音を生かして選んだり並べたりするために必要な基本的な技能を身に付ける。
- ・選んだ音をどのように並べたりつなげたりすると、自分の思いやイメージに近づくかを考え、工夫しながら自分なりの表し方をつくろうとする。
- ・身のまわりの音に興味をもち、友達の音を聴いたり音でやり取りしたりしながら、音楽づくりの活動を楽しんで取り組み、音で表すことへの期待感をもつ。

#### 【担任教師が心掛けたこと】

- ・4月の「リズムのとびら」の経験を踏まえ、安心して音で遊べる雰囲気大切にしながら、今回は「自分で音を選ぶ楽しさ」に焦点を当てた。
- ・児童が見付ける音に「良い、悪い」はなく、どの音も学びの素材になり得ることを、言葉掛けや態度で示し、安心して選べる環境を整えた。
- ・話すことが苦手な児童でも参加しやすいよう、まず音を試す個の時間、その後に聴き合う時間を設定し、自分のペースで活動できるようにした。
- ・「音のよさを見付け合う」文化を育てるため、「いいところを見付けよう」を合言葉にし、友達の音を認め合う関わりを促した。



### 【幼児期の経験を生かす】

- ・ 幼児期に親しんだ「音さがし」「音のまねっこ」「身振りや音と動きを結びつける遊び」などの経験がそのまま学習の入り口となるようにした。
- ・ まずは自由に音を探し、鳴らす活動を取り入れ、幼児期からの「音で遊ぶ感覚」がそのまま学びにスライドするようにした。
- ・ 友達の音に反応したり、まねたりする姿が自然に生まれるよう、音でのやり取りができる場面を多く取り入れた。

### 【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

#### ● 導入：みのまわりの音を“見つける”

T「今日は、教室にある“いろいろな音”で遊んでみよう。どんな音でも大丈夫だよ。」

C「イスがカタカタするよ!」「プリントをふるとシャカシャカする!」

(児童は歩き回りながら、次々と音を見付け、友達に知らせたり、聴かせ合ったりしていた)

#### ● 展開1：音を“選ぶ”

T「たくさん見付けた中から、『今日のお気に入りの音』をひとつ選んでみよう。」

C「シャカシャカがいちばん好き。速くて気持ちいい!」

C「ぼくはトントンの。はねてるみたいで楽しいから!」

T「どうしてその音が好きなんだろう?」

C「なんかワクワクする音なんだよ~!」

(音の特徴を自分の言葉で話そうとする姿が見られた)

#### ● 展開2：音を“並べる”

T「えらんだ音を、好きな順番で並べて、『音のながれ』をつくってみよう。」

T「3回でも4回でも、くり返してもOKだよ。」

C「シャカ・シャカ・トン!」「トトン・ふわっ!」

C「ゆっくり→はやく→しーっ にする!」

(「まねしたい!」という児童が現れ、自然に友達の表現を参考にする姿が見られた)

#### ● 展開3：友達と“つなぐ”

T「みんなの音のながれを、つなげてひとつのながれにしてみよう。」

C「わたしは最後に“しーっ”を入れる!」

(相談したり順番を譲ったりする姿が生まれ、自然な協働が起きていた)

#### ● まとめ：ミニ発表

T「できたながれを聴かせてくれる人?」

C「はい!!」

(演奏後)

C「つながったね!」「なんか物語みたい!」

C「もう一回やりたい!」

(「次もやりたい!」という期待感が、クラス全体の雰囲気広がっていた)

## ② 「音楽科」の学習の始まりから考える意義

幼児期の音遊びでは、音を鳴らす・まねる・反応するなど、身体を使って自由に音と関わる活

動が中心である。小学校音楽科では、この幼児期の自然な音との関わりを「学び」へつないでいく必要がある。

特にⅡ期では、音を聴き取り、違いや面白さに気付くことを出発点とし、児童が自分で音を選ぶ・並べる・つなぐ活動の中で、表現の基礎をつくることが重要である。

このような意義から、本事例では、まず身のまわりの音に耳を澄ませ、自分で音を選ぶ経験を大切にし、その上で並べたりつないだりする活動を取り入れ、幼児期の音遊びが小学校での音楽づくりへ自然につながるように意図した。

### ③事例をとおしてわかったこと（Ⅲ期への見通しとⅠ期の振り返り）

Ⅰ期では、園種や経験によって違いはあるものの、多くの幼児は日常の中で音に触れたり、音をまねたり、友達と音でやり取りするような姿を見ることがある。こうした活動は特別に「音楽」と意識して行われているわけではないが、音の違いに気付く／音で反応する／音で関わる といった基本的な感性が自然に育っていく時期でもある。

4月の実践（「つながるリズムで はじめの一步」）では、幼児期の感覚を生かし、手拍子やまねっこリズム、音であいさつするといった身体で音を感じ、つながる活動を中心に行った。児童は音に合わせて自然と動いたり、友達の音に反応したりしながら、音でつながる楽しさを感じ取っていた。

今回の事例（身のまわりの音を使った音楽づくり）では、その土台の上に、児童が「ながい音」「みじかい音」「やさしい音」など、身のまわりの音の特徴の違いに気付く姿が多く見られた。お気に入りの音を選んでつないだり、友達の音を聴いて「いいね」と伝え合ったりするなど、音で関わり、気付きを共有する学びが広がっていた。

Ⅱ期では、このように音の違いを聴き取り、自分の発想を生かしながら音を組み合わせたり、友達と確かめ合ったりする経験が大切である。

Ⅲ期では、音の働きや使われ方に注目し、どのように表したいかを考えながら表現したり、聴き方を工夫したりする学びへと発展していく。今回のように、身のまわりの音の特徴を捉え、選び、つなげる経験は、そのための重要な基盤となる。

**事例24** II期（1年生7月～9月）  
「がっきのおとに したしもう」  
—音楽科—  
「おなじがっきでも、ぜんぜんちがう音があるんだ！」

事例を読み取る  
キーワード

・音色の違い  
に気付く

#### <事例で伝えたいこと>

この事例では、4月の「体で感じるリズム」の経験を土台にし、児童が楽器の音の違いを聴き、選び、確かめ合う学びを行います。

ひびきの長さや高さなど、楽器の音の特徴に気付く中で、児童は「この音すき！」「こっちの方がひびく！」といった音への実感を伴った気づきを広げていきます。

自分が選んだ音と友達の音を比べたり、「こう鳴らすとちがう音になるよ」と伝え合ったりする姿からは、音を通して関わることの面白さが感じられ、音色の違いに耳を傾ける活動が、II期の学びとして大切な意味をもっていることが分かります。

#### ① 内容

○題材「がっきのおとに したしもう」 第1時/全2時間

##### 【目標】

- ・いろいろな楽器の音の違いや特徴を聴き取り、その良さや面白さに気づきながら、音を鳴らし方に応じて扱う技能を身に付ける。
- ・楽器の音のどんなところが面白いと感じたかを考え、友達と聴き合いながら、音の違いを生かした表し方を工夫する。
- ・楽器の音に興味をもち、音を鳴らしたり聴いたりする活動を楽しみ、音楽活動への期待感をもつ。

##### 【担任教師が心掛けたこと】

- ・前題材の「みのまわりの おとに みみを すませよう」から自然に発展する活動として、手に持てる小物打楽器を取り上げた。
- ・児童が「これ鳴らしたい！」と思えるような、直感的に扱いやすい楽器を中心に配置した。
- ・鳴らすだけでなく、聴き比べる活動を丁寧に行い、音色の違いに気付く力を育てたいと考えた。
- ・打楽器の基礎的な扱い方を学びながら、安心して音を出せる雰囲気づくりを意識した。

##### 【幼児期の経験を生かす】

- ・I期で経験してきた「音をまねる」「音で反応する」ような姿が自然と出せるように、楽器を自由に触れる時間を大切にした。
- ・音を「どう鳴らすか」に正解を求めすぎず、児童の「やってみたい」気持ちを尊重した。
- ・「同じ楽器でも音が違う」「友達の音が面白い」といった気づきが生まれるよう、聴き合う機会を意図的に作った。

【本時での教師の言葉掛けと児童の様子】 T=教師 C=児童

● 導入：楽器にふれてみる

T「今日はこの楽器たちで遊んでみよう。気になるもの、触ってみよう。」

C「これキラキラしてる！」「トントンすると音が変わる！」

C「同じタンバリンでもちょっと音ちがう！」

● 展開1：音の違いを聴く

T「いくつかの楽器の音を聴いてみよう。どんなふうに聴こえた？」

C「カシャカシャってひびく！」「ポンってまっすぐな音！」

T「どうしてそう思ったのかな？」

C「こっちは長くひびくけど、こっちはすぐ終わる！」

● 展開2：気に入った音を見付ける

T「聴いてみて“お気に入りの音”をひとつ選んでみよう。」

C「この音が好き！」「こっちはふわっとしてる！」

(同じ楽器でも音の違いに気付いて選ぶ児童の姿)

● 展開3：音をくらべてみる

T「選んだ音を、友達の音とくらべてみよう。」

C「なんかそっちの方がひびくね！」「こっちは高い音がする！」

(友達の音を聴きながら「違い」に注目する姿が生まれる)

● まとめ：ミニ聴き比べ発表

T「どんなところが面白かったか教えてくれる人？」

C「音の長さがちがったよ！」「ひびきがぜんぜんちがう！」

② 「音楽科」の学習の始まりから考える意義

I期では、日常の中で音をまねたり、聴こえた音に反応したり、友達と音でやり取りしたりするなど、音の違いに気付く・音で関わる感性が自然に育っていく。

II期の本活動では、こうした経験が土台となり、児童は楽器の音の違いに耳を向けながら、「どんな音か」「どう鳴らすとどう聴こえるか」に注目して活動する姿が見られるようになる。

これらの経験は、III期以降の楽器や声を使った表現・音の働きを考える学びへとつながっていく大切なステップとなる。

③事例をとおしてわかったこと（III期への見通しとI期の振り返り）

I期の幼児期では、日常の中で音をまねたり、動きで表したり、友達と音で関わり合う姿が多く見られた。こうした活動は特別に「音楽」と意識されていたわけではないが、音の違いに気付く・音で反応する・音を通して関わるといった感性が自然に育っていく時期である。

4月の実践（「つながるリズムで はじめの一步」）では、幼児期の身体表現の感覚を生かし、手拍子やまねっこリズムなど、身体で音を感じ取る活動を通して、児童は音楽に安心して入り込む姿を見せていた。音であいさつしたり、リズムをつないだりする活動は、音楽のもつ「つながる力」に自然と出会う時間となっていた。

今回の事例（楽器の音の違いに気付く学習）では、その土台の上に、児童が音をより意識的に聴き分ける姿が広がった。「ひびきがちがう」「これは高い」「これはやさしい音」など、楽器の音

色の違いを捉え、その違いを言葉にしようとする姿が見られた。また、友達のを聞いて「それいいね」「ちがう音がするね」と伝え合う中で、音のよさを共有し、確かめ合う学びも生まれていた。

このように、4月の「からだで音を感じる学び」から、今回の「音の特徴に気付く学び」へのつながりが確認でき、Ⅱ期において大切なのは、音に耳を傾け、その違いを感じ取り、友達と確かめ合いながら学びを深めていくことであることがわかった。

Ⅲ期に向けては、今回育った音の違いを基に発想する力・組み合わせを考える力へと発展していくことで、より創造的な音楽づくりへつながっていくと考える。